
僕とキリコの怪奇譚

心楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とキリコの怪奇譚

【Nコード】

N5890K

【作者名】

心楽

【あらすじ】

普通に普通で普通の高校生の僕、ある日そんな僕の目の前に一人の美少女が現れた。「契約しない？」彼女の言った一言で僕の日常は『普通』から外れだした。

第0章・1 キリコさんとの邂逅

「契約しない？」

目の前に立つ綺麗な少女が僕にそう言った。

それが普通の少女だったら僕は、ヒヤッホーイ！ どんな契約をこんな美少女と結べるんだよ！ ビバ、青春！ と驚喜乱舞しただろう、多分。

ここで一つ誤解して欲しくないのは、僕が男色家ではないということと、ロリコンではないということだ……二つだった。

話を戻すと、僕はこの契約を断るつもりだ。

何故僕が美少女からのお誘いを断らさせてもらうかと言うと、答えは一つ、彼女は立っているから。

宙に立っているからだ。

いつもと変わらない朝。 変わっていたのは一日中霧が出ていたことと、トーストが焦げたことくらいだった。
いつもと変わらない日常。

いつもと同じように学校に行き、いつもと同じように学校が終わればすぐ帰宅し、病院に行き、妹の様子を見て、夜になれば塾に行く。

いつもと、本っ当にいつもと変わらない日常となるはずだった。
いつもと変わらない塾からの帰り道、もう既に十時を回ったころ

事件は起きた。

人っ子一人いない夜道をぶらぶらと歩いている僕の視線の先にある空中に霧が集束し始めた。

僕が呆気にと取られていると、みるみる内に真っ白な人の形をした霧になり、そして、霧が霧散すると中から少女が現れた。

少女は真っ白な瞳に真っ白な肌、そしてその白さを際立たせるような黒いドレスを着た、触れれば消えてなくなりそうな、そんな儂げな美しさを備えた美少女だった。

そして、形の言い唇を動かしたのだ。

「契約しない？」

そして、今に至る。

彼女は腕組みし、答えを待っているのか、黙って僕を空中から見下ろす。

ドレスの中が見えそうで見えないのが残念だ、とつまらない思考に至りながらも、僕は僕の中のチキン魂が彼女がもしヤのつく職業の娘だったり、とんでもない魔力を持った魔女っ子だったりしたら、契約を断ったら後々大変になると叫ぶので、契約を断る前に彼女の素性を教えて貰うことにする。

僕がビビりなわけではない、僕の中のチキン魂の意思を尊重してやっただけだから。

「えーっとさ、君、名前は？」

「霧から生まれたキリコ」

……あー、人間じゃない気はしてたよ、ただ、昔話風な自己紹介をされてもこちらは反応に困る、得意気な顔とかしてるので余計困

る。

「人間？」

「霧から生・ま・れ・たキリコ！」

「えーつとさ、霧の精霊的な感じのあれかな？」

「精霊と言うよりか悪魔と言った方が近い」

少し寂しげな顔をする美少女、キリコさん。

「契約つて、言ったよね？」

「ええ」

「じゃあ、契約と言うからには、僕は何か代償を払わないといけないんじゃない？ キリコさんは悪魔なんだったら、なおさら」

「特に要らないわ。感謝しなさい私の広い心に」

悪魔と契約するのに何も要らないとか、オカシイでしょ、悪魔的常識で。

「ってことは、契約することでキリコさんが得るものは特にないと」「貴方と契約出来る」

「それで満足ならいいけど……ちなみに僕がキリコさんと契約するメリットって何かある？」

「……………」

凄く考えてる。

考える人と同じポーズして考えてるよ。

「……………湿度調節出来るから加湿器代わりに……………どっ？」

「その契約断る！」

くるりと身を翻し、僕は後ろを見ずに駆け出した。

さっきまでの会話も、宙に浮く美少女キリコさんも置いて、僕は全力で走る、否、全力で逃げる。

宙に浮く美少女とか、契約とか、霧の精霊やら悪魔やら、僕は自分に無関係なことには無関心、関係あることには全力で取り組むという考えだから、僕が彼女と契約しても、しなくてもメリット無し。よって、僕とは無関係、僕じゃなくても変わらない、むしろ彼女は僕より他の奴と契約した方がいいだろう、多分。

そして僕は今までの出来事を綺麗サツパリ忘れて、暖かいベッドで寝るのが吉なのだ。

2 僕の日常

キリコさんと会った日のことを鼻を噛んだティッシュのごとく、記憶の片隅に放り投げて一週間。

僕はいつも通りの朝を迎え、いつも通り朝ご飯を食べ家を出た。ドアを開けるとそろそろ学校や新しいクラス、新しい生活に慣れ始める頃の五月の風が頬を撫でる。

大きく深呼吸をしてぽかぽかとした空気を肺いっぱい吸い込む。何とも言えない五月の眠気が僕を襲い、半分眠った脳のままゆくりと動き出した足に任せ、僕は学校に向け歩き出した。

後ろを振り返ると閑静な住宅街に建つ、僕が住んでいる普通の家が僕を見送る。

都会から近くも遠くもない場所、いわゆる郊外と言われる場所に立地するそれほど大きくないこの町が僕の生まれた町であり、育った町だ。

僕の通う高校は大きくも小さくもなく、僕が大好きな『普通』の高校に属する。

教室のドアを開くといつも通りの顔ぶれが、いつも通りのグループとつるんで、楽しそうに話をしたりしている。

自然とにやけそうになる口元を抑える。

最高だ、『普通』最高！

ひくつく口の端を静めながら、いつも通りの窓際に位置する自分の席に座り、ボードと黒板を眺めていると、後ろからいきなり肩に手を置かれ、驚いて体が震えた。

が、まあ、大体誰がこんなことをするかは予想はつくんだけど。

「おっはよう！ ビックリしたか？」

後ろからかけられた陽気な声で相手は簡単に判断出来た。

人とも余り話さず、部活にも入ってない僕にこんなに陽気に話しかける奴はこのクラスでただ一人、あいつだけだし。

「君の名前が加藤用心かとうしんじんってのほうがビックリだよ。僕の中の高校に入学してからのビックリランキング第三位に間違いなく位置してる」

「マジで!? 親父たちにお礼言わなきゃ! ちなみに一位は?」

「君が変態ってこと」

「会って一ヶ月の奴に失礼だな」

「事実だろ?」

「言ってみろ、俺のどこが変態だ! 五文字以内で!」

「ロリコン」

「おお、五文字以内どころか未満で返してくるとはやるな。だが、一言言っておこう! ロリコンは変態ではない!」

染めている金色の髪を揺らしながら胸をはって彼は答えた。

加藤とは高校に入学するちょっと前に、妹の見舞いで病院に行つた時、彼が小学三年生ぐらいの子と話している(本人曰く、口説いていた)のを見かけ、それから知人となつたわけで、一応ロリコンってことはまだ、クラスの皆にはバレてない。

ロリコンであることを除けば、中性的な顔立ちで身長もかなり高
いからモテるのに……残念な奴。

「どうした? ため息ついて」

「どうやら、僕はため息をついてたらしい。」

「いや、神様のイタズラを嘆いただけだよ」

「ふーん、お前が160数センチしかないちびっこなことか?」

「お前は言つてはならないことを二つ言った!」

「一つだけど」

「嘘つくな！ ちびっこと……と……」
「一つだろ？」

……一つだった。

「……………冗談だよ」

「その間はなんだ」

「うるさいロリコン！」

「ありがとう」

「何で!？」

「俺は誇りに思ってるからだ」

「……………一応聞いときたいんだけどさ、どこからどこまでがオツケーなの？ 自分の歳より三歳ぐらい下の方もオツケーならまだなんとか」

「小五以下！」

目の前の犯罪者予備軍の高校男子が、爽やかな笑みで爽やかに言い切った。

もう逆に清々しい。

「……………そ、そうか」

「おう！」

てか、逆に引いた。

「まあ、あれだ。敵は多いぞ」

「百も承知。恋には壁があるものだ」

「君の場合、断崖絶壁だけだね」

「好きだから仕方がない。好き過ぎで止まらない。愛らしすぎて抱き締めたい！ そういう存在なんだよ彼女たちは」

「その言葉、同年代の奴に言ってあげなよ。ほら、例えば……山田さんとか」

と言つて、友達と楽しそうに話している山田さんを指差す。
セミロングの黒髪が綺麗な娘で、いつも加藤のことをチラチラ見ている。

加藤が山田さんを見ていると目が合い、山田さんは顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「あの娘、多分、加藤のこと好きだよ」

この機会に加藤が正しい恋愛対象に向かうことを期待しながら、僕は加藤に尋ねた。

しかし、加藤はゆっくりと首を横に振る。

「中学生なら歳を取れば守備範囲に入りそうだけど、女子高生とか、ババアじゃん」

「謝れ！ 全国的女子高生に謝れ！」

「しょうがないだろ？ 何あの、柔らかかそうな太ももの脂肪、何あの、包容力のありそうな胸の肉塊、俺はあんなもの要らない！」

「それがいいんだろ！」

加藤が僕と不毛な争いを続けていると、加藤に一人の女の子が近づいて来た。

「ねえ、加藤くん」

「ん？」

「今日の放課後家庭科室来てくれない？ クッキー作るんだけどさ、男子がいないと食べきれないと思うの」

「あー、ちよっと待って」

と言いつつ加藤は携帯のスケジュール表を開く。
そのスケジュール表を後ろから覗きこむと、今日の日付には何も書かれてないけど、明日の予定には『ゆみちゃん・小学校の近くの公園、四時』と書いてある。

こいつ、大丈夫か？

加藤は携帯を閉じると、女の子に笑顔を向ける。

「いいよ。行く行く」

「ホント！？ 良かったありがとう」

こつこつ笑顔とかが出来るからこいつはモテるんだよね！。

「あつ、秋白くんも来る？」

「え！？ 僕！？」

「そうだよ。そんな驚かなくてもー」

いきなり名前を呼ばれたことにも少しビックリしたが、何より自分の名前を知ってることにビックリした。

「……ごめん、悪いけど放課後はちょっと」

「ん、用事でもあるの？」「妹の見舞いに病院へ行くから」

「あー、逆にごめんね。誘って」

「いや、別に気にしてないよ」

「そっか、んじゃ、まあそれだけだから、加藤くん来てよ、秋白くんもまた作るとき誘うから」

去っていく彼女の背中を見ながら加藤は呟く。

「いい子だな、あの娘」

うん、初めて君と気が合ったよ。
でも、君や彼女みたいな人間の横にいと、自分の社交性の無さに少し嫌気が差す。

「どうしたの？ ニヤニヤして」
「えっ、ニヤニヤしてた？」

僕はリンゴを剥いていた手を止め、ペタペタと頬を触り確かめる。

「うん、してたよ」
「そっか、多分あれだね、今日はいい子に出会ったから」
「？」

ベッドの中から上半身だけ出してる妹、千鶴ちずるが首を傾げる。

千鶴ちゃんは家族の鼻眉目を抜きにしても可愛い顔をしており、ショートカットの髪型が良く似合う明るい妹だ。

しかし、入院している患者が着る薄い青色の衣服の襟元や袖から覗く細い首や細い手首、肌の異様な白さを見るたびに、千鶴ちゃんちずるは病気にかかっているという事実が否応なしに理解させられる。

まあ、病院にいるんだからどこかしら悪いのは分かるのだけれど。医者が言うには病気の原因は不明、ただ日々ゆっくりと体が衰弱していくという謎の病にかかっていることが判明し、それから三年間ずっと入院している。

「あーあ、万能薬が欲しいなー。ドラゴンの住む山に行って取って来てよ、お兄ちゃん」

「兄に対してどんな大冒険を期待してるんだ」

「お願い、お兄さま」

「言い方の問題じゃないよ」

妹の明るさは病気になってからも変わらず、この明るさに入院した最初の頃は僕ら家族の方が助けられたぐらいだ。

リンゴ剥き再開。

くるくるとリンゴを回すたびに、くるくると自分の記憶を廻す。

幼稚園の時から水泳、新体操、空手、剣道等々、両親が僕に興味でも与えようと、そういう教室に入れる度に、妹は僕の後を追うように、しかし僕とは違って進んで教室に入っていた。

案の定三日坊主宜しく、僕はすぐ辞めてしまったのだけれど、妹は全てをやり続けていた。

小学一年生にして、そこら社会人より忙しく、週に九つもの習い事をこなしていた。

そんな元気な妹が、ベッドの上で寝たきりになるとは。

リンゴを剥き終わると同時に回想終了。

フォークを一本、皿の上に切り分けたリンゴに刺し千鶴ちゃんに渡すと、窓を眺める。

もう外が暗くなってるのを確認すると、僕は鞆を背負い立ち上がる。

「じゃ、そろそろ兄ちゃん帰るから」

「むむ」

「リンゴ食いながら挨拶するなよ」

頬をリンゴでいっぱいにしながら千鶴ちゃんは手を振る。

手を振り返し、僕は家路に向かった。

「ただいまー」

帰ると時計は八時を回っていた。
時間を数字で確認するとすぐお腹が減る。
適当に料理を作り晩ご飯を食べ終わった後、ソファで寝転び、
歯に挟まったキャベツを舌で取るうとしながら、風呂が沸くのを待
つ。

二年前からうちの両親は二人とも海外で仕事していて、妹が病院
にいたので実質僕の独り暮らし。

しかも、妹が入院しているので結構な仕送りをしてくれるため、
高校生としてはリッチな財布の中身になっている。

が、最初の頃はヒヤッホーと脳内アドレナリンが大放出していた
けど、掃除、洗濯、炊事など、家事全般を自分一人で行きなりやる
のは大変だった。

今は慣れたけど。

風呂が沸いたの知らせる機械音が耳に飛び込む。
沸いたみたいだな。

体を洗い、頭を洗った後、お湯に浸かる。

「はあああああ」

この時間が一番幸せな時間だなー！。

伸びをし、頭の後ろに手を組み枕にする。

自然と欠伸が出て、僕は自分の本能の赴くままに、この快楽に浸
ろつと目を瞑ろつとした時、

「あんだ、疲れてんのねー、風呂場で眠ろつとするなんて」

聞き覚えのある声が耳に入った。
目を開けると僕の頭の中で捨てたはずの記憶が蘇り始める。
目の前でふわふわ浮いている綺麗な少女に、僕は何だが見覚えが
あるぞ。

「キ……リコ……さん？」

「はぁーい」

「うわわわわわわををわ」

半分眠っていた脳が完全に目覚めた。
何でいるんだよ！ てか、僕、裸だし。
急いで大事な部分を手で隠し、キリコさんを見上げる。
キリコさんは僕の口の中を指差す。

「キャベツ挟まってるわよ」

………うるせえ。

3 僕は逸れ出す

「何しに来たんだよ。て言うか、霧の悪魔じゃなかったのか。何で湯気から出てくるんだ？」

「霧とか、そういう煙っぱいところならどこでも現れることが出来るのよ」

「煙っぱいって、いやにザックリしてるね」

「細かい男は絶対彼女出来ないわよ」

「決めつけんなよ！ 細かい男に彼女が出来ないなんて決めつけんなよ！ て言うか、悪魔か精霊かもはつきりしてない奴に言われたく」

「そういうところが細かいの！ 貴方は一生彼女ができないタイプの人間ね！」

あれ、何でだろう。

僕を指差してるキリコさんの指が、僕の胸に刺さっているわけでもないのに、どうしてこんなにも胸が痛いんだろう。

「……言葉の銃刀法違反で捕まれ」

「何か言った？」

「別にな」

「何か言った？」

「別」

「何か言ったでしょ!？」

「言葉の銃刀法違反で捕まわって言ったんだよ！」

「やっぱり言ってたじゃない！ しかも、よく分からない！」

「……すいません」

「いいわよ」

「で、結局君は何の用で来たの？」

「うん？ 契約しに来たに決まってるじゃない」

「だから、僕は契約なんてするつも」

「あなたの妹、謎の病にかかっているらしいわね」

何で知ってるんだこいつ。

それは、僕には関係のある話だ。

僕に関係があるのなら全力で事に当たる。

もし、妹に何かする気なら。

「あら、そんな怖い目で見なくても何もしないわよ」

「……妹が病気なのを何で知ってるんだ」

「私は霧から生まれたキリコよ。タバコの煙や物を燃やした時に出る煙、私は煙があれば何処にでも現れるわ。だから、病院の喫煙所から情報を仕入れに行ったってわけ」

「おい！ 誰かに見られてないのか!？」

「大丈夫よ。薄い煙の状態で動いたから。見えないわ」

「そうか、そりゃ良かった。病院が大騒ぎになるところだったよ」

美少女が宙に浮いていたらね。

「何で君は僕の妹のことを調べてたんだよ。メリットが無いじゃないか」

「あるわよ」

「妹で僕を脅すつもりか？」

「近いわね」

キリコさんが不敵に笑う。

「貴方の妹の病気、あれは人間の手じゃ治せないわよ」

「はあ!？」

「あれは私と同じような存在。異なる世界の住人の仕業よ」

「幽霊とかそういうの？」

「存在の格が幽霊とは比較にならないわ。幽霊は人から生まれたもの。貴女の妹に憑いてるものや私みたいな存在は、神や妖怪、悪魔って呼ばれる、世界から生まれた存在ね」

「お札とかで退治出来ないのか？」

「そこら辺の神社で売ってるやつはただの紙くず同然。特別な力を持っていないか、存在の格が同じ者にしか消せないの。でね、契約をするとそういう存在に存在の格が上がるの」

「だから、妹を治したかったら、君と契約しろ、と」

「話が早くて良かったわ」

キリコさんは綺麗な微笑を顔に浮かべる。

「で、どうするの？ 契約する、しない？」

答えなんか決まってる。

「するよ」

「あら、決断が早いわね」「それで、妹が治るなら」

それで、妹が治るなら、僕は何でもしてやる。

僕は何でも出来る。

「でも、もし治らなかったら、あるうことが悪化したりすれば、僕は君をどんな手を使っても消す」

「あら、怖いわね。安心して、貴方の妹を殺してもメリットがないから。それに治る保証もするわ」

「で、契約するのはどうすればいいんだ？」

「接吻。今風で言えばキスよ」

「キキキキキッス！？」

言いなれない言葉で舌を噛みそうになる。

「そうよ」

そう言っけてキリコさんは僕の頬に両手を添える。

「いや、その、心の準備が、ですね」
「黙りなさい」

ゆっくりとキリコさんの柔らかかそうな唇が近づいてくる。
ああー、僕のファーストキスはせめて人間としたかった。
覚悟を決め、固く目を瞑る。
唇にスウーとキリコさんの吐息がかかっているのが分かる。

「終わったわよ」

「……へ？」

「もう終わったわよ。キス」

いやいやいやいや、唇の感触ゼロでしたけど。

「マジですか？」

「マジよ」

「……触れてる感覚してませんけど」
「私は霧から生まれたキリコよ。私の実体は霧。貴方に触れられないわ。でも、契約したことで力が増したから、もう実体化出来るし触れられるけど」

ええー！ ああ、あれか、キリコさんの吐息だと思ってたのはもう唇が重なってたのか！？

嘘だろ？ 初キスがサワーツてしたって悲しすぎるだろ。

いや、待てよ、これはキスなのか、違う！ これは半キスだからファーストキスは半分残ってるはずだ！ 多分。

「取り敢えず、風呂から上がりたいから出てってくれない？」

リビングのテーブルを挟んで、キリコさんと向かい合って座る。

「で、妹に何が憑いてるんだ？」

「あれは、低級の神ね。貴方の妹、神社とかで何か悪さしなかった」「いや、してないと思う」

僕の見る限りでは千鶴ちゃんはそのようなことをしてないし、そんなことをするような娘じゃないはずだ。

「そう？ まあ何かしらの理由があつて、貴方の妹に憑いてるんだと思うんだけど、あれはタチの悪い存在ね」

「うん、あんないい娘にとり憑くなんて」

「貴方、結構なシスコンってやつじゃない？」

そんな自覚は無かったけど、若干そうかも。

「あれはゆっくりとゆっくりと衰弱させて、病気のように見せて最後は殺すつもりね」

「あのさー、今思ったんだけど、そこまでわかってるなら契約しなくても君一人で倒せるんじゃない？」

「無理ね。一応相手は神なのよ。実体化出来るほどの力を持つてるの。まあ、私は霧だからあの程度の力なら負けることはないと思うけど、勝つことも不可能よ。だって霧だもの相手も私もお互い触れられない」

「でも、もう君も実体化出来るぐらいの力がついたんだろ？ 勝てるんじゃない？」

「貴方の努力次第ね」

「はあ！？」

「何度も言うけど私の実体は霧よ、霧。実体化出来るほどの力を持つとが、できることは霧になることぐらいよ。後は、煙があればどこでも現れることができるぐらいね」

「契約破棄だ！」

「契約したらどちらかが死ぬまで契約は解かれないわ。じゃあ、私は消えるわね。呼びたかつたら煙を出して名前を呼んでね」

手を振り、キリコさんは霧散し消えた。

「……詐欺じゃねえか」

次の日。

柔らかな日差しに思わず目を細める。

今日は祝日、浮かれきったカップー達が、野原でお弁当を食べて「あ、ご飯粒ついてる。取って上げる」「恥ずかしいわ。ウフフフフフ」「アハハハハハハハ」とイチャイチャする、非常に嫌気が差す日だ。

そんな祝日に僕は趣味の散歩を兼ね、妹の病院に向け歩いている。

「あの一、キリコさん。そこにいますか？」

いるわよ

頭の中に声が響くが辺りを見渡しても姿は見えない。
が、特に慌てることもなく話し出す。

非日常的なことに簡単に馴れ始めている自分が若干怖い。

二週間ほど前ならビビって逃げてるだろうなあ、妹のことが無かつたら今でも逃げてるかも知れないけど。

「幾つか質問いいですか？」

「ご自由に

「今、何処に？」

貴方の中

「僕の！？」

もしかして心とか読んじやうのか？ 僕のプライバシーが。

何を考えてるか知らないけど安心して。貴方の中にいる限りは私は存在していて存在してない。そういう存在。思考を働かせることは出来ても見ることも聞くことも、話すことも出来ないわ。貴方が呼び出してくれたら自由に動けるようになるけれど

「僕の心の声は……」

読めないに決まってるじゃない

「じゃあ、もう一つ質問」

と言いながら指を一本立てた時に、通りすがりのおじいさんがいぶかしげな目を僕に向けているのに気づいく。

客観的に見れば僕は、歩きながらぶつぶつ独り言を言っている青年。
年。

……キモッ！

急いで近くのコンビニに入り、ライターと適当な雑誌を買って、

人気のない路地に行き雑誌のページを適当に破り燃やす。

黒い煙と焦げ臭い匂いが立ち上る。

「キリコさん」

黒い煙が宙に収束したかと思うとキリコさんがフワリと優雅に降り立った。

「呼ばれて飛び出て、はぁーい」

「それは問題無いの？ 著作権的に」

「うーん、セーフじゃない。で、何の用かしら？ もう一つ質問すると言った切り何も言わないから、ぬったり心配したわ」

「何か気持ち悪い心配の仕方だね。言い訳させてもらうと、客観的に見れば僕がたつたらな状況になっていたからね」

「なにそれ、何だか楽しそうな状況ね」

「楽しくはないよ。高校生がぶつぶつ言いながら歩いているという、気持ち悪い状況だから」

「ふーん、それで私を呼んで普通に女の子と話をしている状況にしたいと言うことね」

「うん、僕の名誉のためにも」

「いいわよ、どうせ契約したら主の命令には逆らえないし、主に嘘もつけなくなるし」

「主？」

「ええ、契約するのは主従関係を結ぶことよ、貴方が私の主になるの」

「え、そうなの？ てか、それでいいの？ キリコさんは」

「いいわよ。私は契約することが目的だもの」

「ふーん」

何か腑に落ちないな。

何でこんなに契約に拘るんだ？

「そーいやーさ、町の中見ても何にも見えないな。幽霊とかそういうの見えるかと思っただけだ」

「見えるわよ。貴方はもう私達と同じ存在になったんだから。ただ、私みたいな人外の存在は少ないし、人間程度が死んだところで強烈な憎悪や悪意を持っていない限りこの世に存在せずに消滅するわ」

「人間の存在の格が低いから？」

「そうよ、だんだん分かってきたわね」

「まあね、僕は順応性があるらしいから」

ここ一週間で僕はキリコさんと出会い、逃げて、契約したりしてこれから妹にとり憑いているやからを倒しに行こうとしている。

どうやら、僕は『普通』ではなくなっただけだ。

4 受動的タイプ

妹が入院している病院に着いたのは十二時を過ぎたころだった。

「じゃあ、私は消えるわね」

気を効かせてくれたのか、キリコさんは病院が見えるぐらいの距離まで来た時に消えてくれた。

正直ありがたい。

病院の自動ドアをくぐり病院に入ると、よく病院に来る僕と顔見知りで少し年配の看護婦さんが僕を見つけ近づいて来る。

「あら、また来たの?」

「はい、千鶴がいつもお世話になってます」

「頭を下げなくてもいいのよ。私たちも原因が分からないから手の施しようがないから申し訳ないわ」

「いえ、そんなことはないですよ」

「そう。それでね今日ね……」

「おーい、看護婦さん」

看護婦さんと世間話に入りそうになった時、待合室にいた一人のお爺さんが看護婦さんと呼んだ。

グッジョップお爺さん。この看護婦さん話が長いんだよね。

「はい」

声を上げ駆けていく看護婦さんの後ろ姿を見届けると、僕は千鶴ちゃんの病室に足を向ける。

千鶴ちゃんの病室はこの病院の四階の一番奥の部屋にある。歩いてみると、病院の特有の独特な匂いが鼻の奥を刺し、傷口をくすぐる。

僕は病院の匂いが昔から嫌いだった。

なんだか病院の匂いは人の生気を奪っていくような気がする。

薬品の匂い、死を待つ人の匂い、病気が治ると信じる人の匂い、治せない病気を治そうとする人の匂い、負の匂いが充満する病院という場所に、希望や楽しみがあるのだろうか。

僕は入院をしたことがないし、大きな怪我もしたことがない。

だから、僕の病院に対する考えは偏見に満ちていると思う。

千鶴ちゃんの病室のドアを開ける。

「よっ」

「あ、お兄ちゃん、来てくれたんだ」

ただ、感染の恐れがないとは言え、謎の病のため病院の四階の一番奥、一人部屋の病室に隔離され、日に日に少しづつ自分が痩せ細っていくのを体感する千鶴ちゃんのことを思うと、病院には希望がないと思ってしまうんだ。

笑顔の千鶴ちゃんに笑顔を返しながら、僕はベッドの横に座る。

今なら見える、何か青白い物体が千鶴ちゃんの腹に乗っている。

その物体に触ろうと手を伸ばしたが、僕の指は千鶴ちゃんの腹を撫でるのみでその物体に触れることはなかった。

まさか、一つの考えが僕の頭に巡ったその時、千鶴ちゃんの細い腕から繰り出された鉄拳が僕の顔にめり込み、僕は椅子から転げ落ちた。

「どこ触ってんのよこの変態！」

「ごめんごめん」

痛む頬を押さえ苦笑しながら立ち上がる。

まさかこいつ、千鶴ちゃんの中に居るのか？

キリコさんに詳しく聞かないと。

途中で買ってきていたリンゴを千鶴ちゃんに手渡す。

「千鶴ちゃん。ちょっと用事あるから今日はもう帰るね」

「えっ、もう行っちゃうの？」

千鶴ちゃんが目を見開く。

いつも最低でも一時間は居るから意外だったかな？

「ごめん、ちょっと外せない用事でさ」

「……分かった。でも、今度はもう少し長くいてね」「うん。約束する」

病院を出て少し歩いたところで、紙を燃やしキリコさん呼び出す。

「キリコさん」

「はぁーい」

手を振りながらフワリと舞い降りるキリコさん。

もうお決まり。

「妹に憑いてるやつは、妹の、千鶴ちゃんの中にいるのか？」

「そっよ」

「じゃあ、どうやって倒すんだよ。千鶴ちゃんの中にいる奴に手を出せないだろ？」

「大丈夫よ。私に任せて」「信じられるか！」

「契約したものは主に嘘はつけないのよ？ それに、信じるか信じないかは貴方の勝手だけど、あの娘を治せるか治せないかは貴方次第よ」

「……分かった。キリコさんを信じるよ」

「あら、そんなに簡単に信じていいの？」

キリコさんはせせら笑う。

……どっちなんだよ。

「いいよ、信じるよキリコさんを。でも、僕がキリコさんを信じれば信じるほど、キリコさんが僕を裏切った時の憎しみは比例するし、僕はどんな手を使っても君を消すよ」

「ふーん、そう、覚えておくわ」

「で、いつ倒しに行くんだ？」

「今晚よ」

「今晚!？」

「そうよ。貴方が戻れと命令してなかったから、今日私は貴方の後ろで薄い霧になって様子を見ていたわ」

「そういうことは先に言っただけ！」

「でも、その私の行動がなかったら貴方の妹が死ぬことになっていたわよ」

「どうということ？」

「貴方が妹のお腹に触れたおかげで、相手を見えていることが気づかれたわよ」

……やってしまった。

そつだ、僕は何で気づかなかつたんだ。

同じ存在になって相手に触れられ、相手が見えるようになった。それは同時に、あっちも僕に触れることができ、僕を見ることができると言うことじゃないか！

第一、前まで存在の格が上だったのだから、やつは前までの僕、人間の存在ぐらい見ることができていたんだ。

そして、じっくりと体の中から獲物を弱らしていたのに、それに気づき邪魔しようとする者が現れた場合、そいつはどうする？

さっさと獲物を殺すか、気づいた者を殺す。

弱りきっている千鶴ちゃんと存在の格が上がった元気な僕。

殺すならどちらが早く確実かは言うまでもない。

「今晚なんて悠長なこと言ったられない！ は、早く助けにいかないよ！」

「焦らないで」

駆け出そうとした僕の足を、キリコさんの言葉が止める。

「でも！ 千鶴ちゃんが！」

「夜までは大丈夫よ」

「何でそう言い切れるんだよ！」

「昼は人間の時間。夜は人外の存在の時間。相手は夜にならないとあの娘を殺すぐらいの力を持たないわ」

「じゃあ、昼間に……」

「貴方、目立ちたいの？ それに第一、私たちも人外の存在よ。夜にならないと相手をあの娘から引き摺り出すことも、倒すことも叶わないわ」

「……分かったよ。じゃあ、今晚だ」

自分の弱さを噛みしめ自分の無力さを飲み込む。

何も知らないくせに焦るのはバカだ。

今はキリコさんの言うことを聞くしかない。

しつかりするんだ、僕。

僕が、他の誰でもない僕が千鶴ちゃんを助けるんだ。

助けなきゃいけないんだ。

「武器の一つぐらい持って来なさいよ」

「当たるのか？」

「相手が実体化したら当たるわよ。まあ貴方も相手の攻撃に当たることになるけど。まっ、死ぬかもしれない、ぐらいの覚悟はした方がいいわよ」

「分かった」

五月になったとはいえ夜はまだ肌寒く、冷たい風が僕の表皮の温度をどんどん奪っていく。

武器として選んだのは定番の金属バット一本、一週間だけ野球小僧だった僕の副産物。

もちろん、袋に入れて肩に担いでるよ。

普通に金属バット持って歩き回ってたらただの危ない奴だからね。しかし、夜の病院つてめちゃくちゃ不気味だな。

幽霊や怖い話がいっぱい出るわけだ。

雑誌の代わりに父さんの部屋から持って来たタバコに火をつける。こっちの方が雑誌より持ち運びに便利だと今更ながら気づいた。タバコとライター、金属バット……不良街道まっしぐら。

「キリコさん」

「はぁーい。副流煙のキリコよ」

「嫌な二つ名だな」

「あら、金属バットを選んだの？ いいんじゃない中々。少し定番

「だけど」

「重々承知だよ」

キリコさんが浮いたまま移動し、僕の前で静止する。

「さあ、行くわよ。私がドアとかの隙間から病院に入って、中から鍵を開けるからついて来てね」

言った瞬間、煙に変わり病院へ進み始めるキリコさんの後ろに僕はついていく。

夜の病院内はとても暗く、非常口の緑の光が不気味に廊下を照らす。

時々やって来る見回りから身を潜めながら、慎重にかつ素早く移動し、僕らは千鶴ちゃん病室の前に着いた。

ケータイで時刻を確認する。

「二時、か」

「五三つ時ね。ちょうどいいわ、この時間が一番私たちが力をつける時間だわ」

暑くもないのに手のひらや額から汗がにじみ出ている。

ジーンズで手汗を拭いてゆっくりとドアノブに手を伸ばす。

「つつ、つつー」

呻き声が病室の中から聞こえて来た。

「マズイ！」

緊張して油を打ってないロボットのようながチガチの体を無理矢理動かし、素早くドアノブに手をかけ、大きな音が出るのも構わず勢いよくドアを開け病室に入る。

不吉な病院の匂いが漂う部屋のベッドの上で千鶴ちゃんが、胸を押さえながらのたうち回っていた。

身体中の血管が血の供給を止めたかのように体温が下がっていく。

「キ、キリコさん」

「分かってる」

キリコさんは煙に姿を変えると、僕の妹の口から体内に入っていく。

そして、千鶴ちゃんの体が痙攣したかと思うと、青白い光を纏った何かが千鶴ちゃんの口から飛び出した。

その何かは地面に着地し一瞬立ち止まると、僕の顔を掠め、後ろの壁を通り抜けて外に出た。

何だ、あれ。

「なにボーツとしてるのよ！ 追いかちなさい！」

何かを通り抜けた壁を見つめていると後ろからキリコさんの声がかかった。

振り返るといつの間にか千鶴ちゃんの中から出てきたキリコさんが立っており、その隣のベッドの上ではさっきまでのたうち回っていた千鶴ちゃんが死んだように横たわっていた。

「千鶴ちゃんは!？」

「大丈夫よ、気絶してるだけ。あいつの場所は私が教えるから早く追いかちなさい」

頷いて病室から駆け出そうとした時、ひんやりとした手が僕の腕を掴んだ。

「何やってるの？ こっちの方が早いからこっちから行きなさい」

振り返ると、キリコさんは病室の窓を開け放っていて、僕をそちらへ引つ張る。

おい、まさか。

「ほら、早く」

グイッと腕を引つ張られ窓の前まで連れてこられる。

ヤバい、緊張が続いていて体が動かない。

窓から夜風が病室に舞い込み、月が僕を笑っている。

「レッツゴー」

気の抜けた合図と共に僕の背中を押され、窓から地面へダイブする。

地面へ落ちつつも上を見上げるとキリコさんが笑って僕を見ている。

まさかの病院から紐なしバンジー、なんか時間がゆっくり進んでる気がする。

あれか、これが走馬灯とやつなのか？

でも走馬灯って何で走馬灯って書くんだ？

走はなんか分かるよ、灯もなんとなく分かるよ、でも馬って。

走る馬の灯りって、馬の記憶じゃん。

走る人の灯りだったら分かるけど。

そうじんとぅ……響きが怖いな。

あっ、でも、人によって人生歩いてるか走ってるか違うし、一概

には言えないか。

キリコさん、裏切ったのかな？

わかんないや、もしこれで生きてたら理由を聞こう、死んだら呪い殺す……のも変な話か、キリコさん人間じゃないし、神様とかを呪い殺すとかできるのかな？

はてなはてなはてなはてな、謎が謎を呼び僕の頭の中で謎がタツプダンスを踊ってる。

はあー、てか、突き落とされた病室、四階だったよね。

さて、現実逃避さいか／＼／＼／＼／＼／＼／

5 僕の初対決

体に襲いかかる衝撃的な衝撃。

もうダメ、この物語はこれにてしゅっりよ……

「何寝てんのよ」

「痛い痛い痛い痛い」

耳がサヨナラしちゃう。

あれ、てか、僕生きてる？

四階から落ちたのに。

かなり痛む体に鞭を打って立ち上がり、服についた土を払う。

擦り傷だらけだけど、骨は折れてないみたい。

人の骨ってチタン製？

「さっ、こっちよ。ついてきて」

走り出したキリコさんに並走しながら問いかける。

「四階から落としても大丈夫と思ったから落としたの？」

「そうよ。身体能力が上がるって言ったでしょ？」

確かに言ってたけど、これは身体能力うんぬんの問題じゃないだ
ろ。

人の構造を無視した耐久力。

ふと気づいたけど、結構な距離を全力疾走してるけど全然疲れな
い。

「めちやくちゃ身体能力上がってるじゃん」

「それだけ上がったとしても、私たちにとってはそれが普通」

「なんか、へこむな。てか、場所分かるの？」

「あー、それはね」

キリコさんが前髪で隠れた左目を僕に見せる。

本来眼球が入る場所にぼっかりと黒い穴が空いていた。

「左目であいつを追ってるから」

うん、グロいね。

十五分ぐらい経っただろうが、雑木林の中でキリコさんが立ち止まり真っ直ぐ前を見据える。

「……来るわよ」

葉っぱが擦れる音共に青い光を纏ったそいつは木々の間からゆったりとした動きで現れた。

千鶴ちゃんを苦しめていたそいつは真っ白な狐だった。

ただ、狐と言うには大きく、虎並みの体軀をしている。

狐は僕らから数メートル離れたところで座り、何かを見定めるように僕らを見つめる。

大丈夫。

千鶴ちゃんを苦しめていた奴が目の前にいるけど僕は冷静でいられている。

大丈夫だ。

黙っていると狐の方が先に口を開いた。

「チツ、何なんだよテメエら、俺が長年かけてあの獲物をなぶり殺すつもりだったのによ。邪魔しやがってよ」

キリコさんが僕の様子を横目で伺って来た。

大丈夫、僕は冷静だ。

「君、名前は？」

「あー、くそ！ あの女旨そうだったのにな」

僕の質問を無視し、狐は空を見上げ悔しがる。

冷静に冷静に。

「僕らは君を殺すに来ただけけど、一つ聞きたいことがあるんだ」

「殺すならさつさと殺しやいだろ。やれるもんならな」

「何で千鶴ちゃんを殺そうとしたんだ？」

「無視かよ。あいつは俺の神社で転びやがったんだ」「は？」

「十年ぐらい前だったかな？ この俺様の神社の境内で人間風情のあいつが転びやがったんだ。きつたねえ人間の表皮を擦り付けたんだ。俺の神社で」

冷静にれい。

理性の檻を本能が叫びながら壊した。

殺せ！ 殺せ！

バットを取り出すことも億劫で、人を殴ったこともない右手を握りしめ気づけば駆け出していた。

キリコさんが何かを言ったが耳に入らない。

全身の血が沸騰して、その熱が僕を駆り立てる。

殺せ！ 殺せ！ そんな小さなことで、十年もの間千鶴ちゃんの

幸せを奪ったあいつを殺せ！

狐が笑った。

気づけば宙に浮いてた。いや、正確には前足で殴り飛ばされた。後からやってきた痛みに思わず呻く。

木々の枝を折りながら空中遊覧飛行、地面へ胴体着陸。

頭から温かい液体が垂れてきた。

血が外に排出されたおかげか、一気に怒りが引いていき頭が冷める。

殺されるかもしれない不安で体が震える。

何バカやってんだ僕。

武器も出さないで勝てるわけないだろ、あれは化け物だ。

立ち上がり、袋から金属バットを取り出し構える。

周りは木々に囲まれ狐の姿が確認出来ない。

何処だ。

何処から来る。

「危ないわよ！」

キリコさんの叫び声が聞こえた瞬間、反射的に屈んだ。すると、ほぼ同時に僕の上を何かが通り過ぎる。

目を上げると、狐が地面に着地し僕に向かって駆けていた。

相手が走ってくるのに合わせ、バットを振ったが狐はそれを楽々

とかわし、僕の肩前で押さえつけ地面に押し倒した。

狐が獣臭い息を僕の顔に吹き掛ける。

「殺せると思ったのか？ 人間風情が」

「一応、僕も君たちと同じ存在になっただけだ」

「同じ存在って言っても、お前は下の下の下だけだな」

「いやいや、上は落ちる恐怖しかないから」

「しゅちゃしゅちゃうるせえな」

狐の舌が僕の首筋を這い、冷や汗が背中を伝う。

「お前から先に食って、その次にあの娘を食ってやるよ」

「それは止めといた方がいいよ。今、僕の骨はチタン製だから」

「餌は喋るな」

狐は僕の頭が丸々二つぐらいすっぱり収まりそうな大きな口を開ける。

ヤッバイなあ、真っ赤な舌が目の前に、鋭い牙が顔の横。

視界の端にキリコさんの姿が見える。

キリコさんは狐の横っ腹にタツクルをかまし、僕を狐から解放した。

僕は素早く立ち上がりキリコさんの横に並んで、狐に向かい合う。

「ありがとう。キリコさん」

「貴方が死ぬと契約がなくなるからね」

「そうかい。ところで何か作戦あるかな？」

「後ろ向きな作戦ならあるけど」

「それは何でしょう？」

と問いかけた時、狐が一瞬で間合いを詰め、キリコさんの腹を噛み千切った。

真っ赤な血が噴き出す光景を狐、いや、僕でさえも思い描いてしまった。

が、キリコさんの傷口からは煙が微かに出ているだけで一滴の血も出ておらず、狐の口からも煙が出ていてその煙が狐の目を覆っている。

キリコさんは腹の半分がない状態で僕を見る。

「とりあえず、逃げて考えましょう」

その言葉を聞いたと同時に、僕らは走り出す。
木と木の間を走り抜け、出来るだけ遠くへとお　横にあった木
が碎ける。

いつの間にか、追いついた狐が木を碎いたのだった。
しかし、未だ狐の目には煙がまとわりついている。

「何処に居やがるんだ！　この近くに居るのは分かってんだよ！」

真っ白な毛は逆立ち、誰の目から見ても狐は激昂していた。
だが、僕らは足を止めない。

「なあ、何で目が見えないのに僕らの場所が分かるんだ」
「匂いや音で追ってるんでしょ」

背後から何か駆けてくるような音がする。
後ろを振り返ると、狐が一直線に僕らに向かって大口を開き、迫
っていた。

僕らはすんでのところまで横っ飛びをして、それをかわす。
さて、どうしようか。

木の幹に背中を預ける。　気づかれないように静かに呼吸をする。
気づくな気づくな。
気づかれたら終わりだ。

体が汗ばむ。

金属バットを強く握りしめ額に当て、頭の熱を冷ます。

冷静に冷静に。

さあ、来るぞ。

匂いを嗅ぎ付けて奴が来る。

突如白い物体が茂みから現れ、僕に向かって駆けて来て喰らいついた。

僕が木の根元に脱ぎ捨てた、僕の汗やら血やら匂いが付いたＴシャツに噛みついた。

これが最初で最後のチャンスだ。

僕は木の一番上から飛び下りた。

着地に失敗したところで問題はない、四階から落ちても平気だったんだから、むしろ、今、考えるべきは狐の頭を金属バットで粉砕すること。

空中でバットを振り上げる。

今頃、騙されたことに気づいたようだけど、もう遅いよ。

体重、重力、速度、腕力、怒り、憤怒、勢い、その他もろもろを

金属バットに託し、目が見えない狐の頭に振り下ろした。

鈍い音と共に狐の頭からは血が噴き出し、金属バットが曲がった。

僕は態勢を崩しながらも着地する。

鉄でも撲ったかのような痺れが僕の腕を襲う。

だけど、こいつはこの程度では死なない。

怒号を上げる狐に間髪入れず二撃目を与えようと、痛みで動かない身体を無理やり捻りながら、曲がったバットをがむしゃらに振った。

横に振られたバットは白い毛が真っ赤に染まった狐の顎の辺りを撲りつけた。

が、ここで僕の体はガタがきたみたいで、撲りつけた勢いのまま地面に仰向けに倒れ、金属バットが握力のなくなっただ手から離れる。地面の冷たさが火照った身体に心地いい。

怒り狂った狐はところ構わず足を振り回す。

それが幸を奏し、その内の一振りがもう動けない僕を掠めた瞬間、狐は僕の居場所に目星をつけたのか手探りで、いや、前足探りで僕を探し当てると僕の腹の上に前足を乗せてきた。

爪が刺さり脇腹の辺りから血が滲む。

「よくも……やってくれたな」

「まあ……そりゃ……どうも」

お互い息も絶え絶えで、荒い呼吸の間に言葉を挟み込む。

「やっと、これで……お前を……ぶっ殺せるぜ……手間……かけさせてくれたな」

勝利を確信した顔で狐は言った。

「毛髪から爪の垢まで……余すことなく……喰らいつくしてやるよ」

勝利を確信した声で狐は言った。

「それは……どうかな？」「なんだと!？」

「君は……勝利……を……確信しているようだけど……勝負の核心を……突いてない……勝利を勝ちとるのは僕でも……君でもないんだよ」

勝負の核心を突く声で僕は言った。

「どういう……意味だよ!」

「もう一人……いるのを……忘れてるよね」

「はぁーい! 霧から生まれた……」

狐の肩越しに、曲がった金属バットを振り上げ宙に浮いているキリコさんが見えた。

「キリコです！」

勝利を確信した声でキリコさんはそう言って、バットを狐の後頭部に振り下ろした。

止めの一撃をくらった狐は地に伏せた。

「ありがとう……キリコさん」

「どういたしまして」

「肩を貸してくれば……嬉しいな」

キリコさんは黙って頷き僕の肩に手を回し、立ち上がらせてくれる。

そして、そのまま立ち去ろうとした時、後ろから声が聞こえた。

「神を殺して……良いと思ってるのか？」

立ち去ろうと促すキリコさんを手で制し、首だけを後ろに向ける。

「君みたいなのが……神だっていうなら……僕は神を殺す。……第

一……神様風情が……人間を……殺すな」

「お前には……これから先……あらゆる困難……災難が待ってるだろっ」

それだけ言うと狐の身体は真っ黒な泥のようになっていき、地面に染み込むように消えていった。

染み込む地面にせめて言葉をかけることにした。

「じめん、僕……無宗教だから。そんなの……信じないよ」

6 僕の日常（KAI）

街灯の灯りがポツポツと点いている道を、キリコさんに肩を貸してもらいながら足を引き摺り僕は歩いていった。

靴が削れるなー、なんてことは考えてない。

さっきの戦いでボロ雑巾のようになったTシャツは捨ててきたから、まずは上になんか着たいなという感じ。

色々なことがあったな、一週間で。

人の一生は平均的に七十年ぐらいで終わりを告げるらしいけど、この一週間は、いや、寧ろ今日は今まで僕が生きた中で一番濃密で、僕の今までの十五年間とこれからの二十年ぐらいを合わせても今日ぐらい濃密にならないだろう。

さすがに今日の出来事は僕の一生に匹敵すると言っちゃえば、僕の一生がとても薄っぺらいものに思われそうなので止めといた。

「ねえ」

考えていたら、キリコさんが話しかけてきた。

「ん？」

「何であの時、私に来るって分かったのよ。来て欲しかったら事前に命令すればいいじゃない？」

「何でって言われても、そんなこと言って、あいつに聞かれてたら終わりだろ？」

本音を言っと一杯一杯なだけだったんだけどね。

「それでもリスクが高すぎるわ。あの時、私に来なかったらどうし

てたのよ。私が狐にのしかかられている貴方を見つけたのも偶然よ」
「まあ、来なかった時は、来るまで喋り続けるつもりでいたけど、それは無理っばかったね」

息切れでろくに喋れなかったし。

「たださ、キリコさんは僕との契約を失いたくないんだろ？ だったら僕を助けるしかないでしょ？」

「それが嘘だったらどうするのよ」

「主に嘘はつけないんだろ？ ただキリコさんを信じてた、つてのは理由にならない？」

自分なりの最高の笑顔をキリコさんに向け「ぐげっ」グーで殴られた。

頬の痛みと共に心がしくしく、なんか悪いことしたっけ？

あれから五日後の二日前、要するにあれから三日後、平凡な毎日に何事もなく僕は舞い戻れた。

狐との戦いで負った傷は二日の間ずっと、寝て起きてご飯食べて寝て起きてご飯食べてを繰り返したら治っていた。

身体能力だけじゃなく治癒力も上がってるみたい。

そして、健康になった身体でゆったりくったりのんびりのっそり学校に向かっていたら、後ろから後頭部を叩かれた。

振り返ると加藤が立っていた。

「ういっすー！」

気さくに片手を上げて挨拶してきた彼を、僕は気さくに無視して

学校に急ぐ。

僕が歩き出したのを見て、加藤は慌て小走りで僕の横まで来ると、僕と歩幅を合わせて並走する。

「秋白く〜ん？ 無視はないでしょ？ 無視はいけグボツ！」

金髪ロリコンの鼻っ面に裏拳を叩き込んだ。

だが、ロリコンも大したもんで鼻を押さえながらも歩みを止めない。

「何するんだ！」

「いや、五月蠅かったから、まさに五月に現れた蠅の如く」

「友達に対して裏拳するか普通!？」

「ごめんめん」

「謝る気ないだろ」

茶目つ氣謝りは加藤に効かなかった。

何ら変わりのない生活から、大きく変わったことが三つあった。

一つ目は、千鶴ちゃんに取りついていた狐を倒したことで、千鶴ちゃんが回復に向かっているのだ！ ヤッホー！ 両手を上げて僕大喜び、病気が治ったことを知らせた医者苦笑する。

幸せにこれからよろしくと挨拶し、不幸せに今後一切関わりたくはありませんと土下座する。

閑話休題、千鶴ちゃんは病気が治ったので、四階の孤独一人部屋から二階の大部屋に移動することになった。

ただ、弱りきった身体を治すのと、様子を見るためまだ家には帰れないみたいだ。

まあ、同じ部屋の間がみんな歳が近く、見舞いに行く度元気に

話しをしてる姿を見ると、案外病院も悪いもんじゃないかな、と思
い直した。

今では、あの病院の匂いの中には生きる希望を持つ人の匂いや、
早く元気になれと願う人の匂いも混じっていると考えたと、嫌いだ
った病院の匂いもそれほど嫌じゃなくなった。

二つ目は、キリコさんに僕の家の中であれば、僕が呼び出したり
命令しなくても、自由にしてもいいという命令をした。

まあ、今回の僕なりのお礼。

ただ、人に見られないという条件付きだけど。

だから、この頃毎日僕が帰るとキリコさんが迎えてくれる。

今日も、家に帰ってリビングに入ると、キリコさんがソファーに
寝転がって僕の秘蔵ポテチを食べながらテレビを見ていた。

「あら、お帰り」

キリコさんは首だけこちらに向けて言った。

「……それ、僕のポテチ」

「隠し場所が甘いわよ、ベッドの下なんて」

キリコさんはスナック菓子に大ハマリで、次々となくなっていく
お菓子をみて危機を感じた僕が色んなところに隠したのだが、帰っ
てくる度、一袋見つけだして食べている。

てか、

「それは、僕が楽しみにしてた期間限定の地中海風パスタ味！」

「ごめん、全部食べちゃった」

目から煮汁が出そう。

「自由にしているからって、自由にし過ぎだろ！」

「良いじゃない家の中だけなんだし、嫌なら命令したらいいじゃない、死にかけて貴方を助けて、ボロボロの貴方を家まで運んで、結果として貴方の妹を助けた恩人は誰!？」

「……キリコさんです」

「そう、私よ！ でも、私は心が広いから命令するのを許してあげるわ。さあ、命令したかったらしなさい！ この、私に！」

クソー、ソファーに寝転がりながら良い顔するなよ。

千鶴ちゃんの事を引き合いに出すのは反則じゃないか。

そして、三つ目は……ごめん、二つだった。

そんなこんなで僕の生活は少し変わってしまったが、普通に帰っていった。

6 僕の日常（KAI）（後書き）

はい、ども、心楽です。

まず、ここまで読んでくれた方、ありがとうございます！ 今回の第0章は結構多めのプロローグです。一人称を長編でやるのは初めてで、不安で脳が満たされています。感想、アドバイス、評価、一言、叱咤激励、どんな些細なことや、気になることでも、何でもドシドシ感想・コメントに書いてくれたら嬉しいです。よろしくお願いします！

第1章・嘘つき探し

世界は平等ではない。

世界は厳しく、酷く残酷だ。

お前らが正直者だろうが嘘つきだろうがそんなことは関係ない。

子供であろうとも大人であろうとも老人であろうとも男であろうとも女であろうとも、そんなことは全く関係ない。

憎い。

全てが憎い。

憎くて憎くて血へどが出る。

何故、俺たちがこんな目に遭わないといけない。

何故、俺たちがこんなに苦労しないといけない。

何故、お前らはそう勝手なんだ。

殺意が臨界点を突破して皮膚を食い破って出てくる。

殺してやる。

殺して、殺して、殺して殺して、殺して、殺して殺して殺して殺

して殺して殺して殺して殺して。

殺してやるよ。

1 連続殺人

夏の足音がすぐそこまで来ている六月。

暑い、というよりは暑い。

教室の窓から見える青空は澄みきっていて、葉っぱは青々、太陽サ
ンサン、もう、夏じゃない？ これ。

しかしまあ、学校の三時間目は何故こんなにお腹が減るのか。

これはまだ僕が華の高校生と言うか、鼻につく高校生だからなの
か。

はたまた、人間はこの時間には大抵腹が減るのか。

はたまたまた、僕がただ食い意地を張っているだけなのか。

はたまたまたは、授業中だというのに、僕の隣で教科書を立て
て机の上に置き、その影で弁当を食うという、古典的でそれでいて
今じゃ誰もやらないようなことをしている友人のせいなのか。

あっ、シヨウガ焼き美味しそう。

お弁当の中身を拝見していると、弁当の所有者（なんだがこう表
記するとカッコいい）、加藤用心は僕の方を向くと、「食うか？」
とでも言うように、箸でシヨウガ焼きを一枚掴みとるところちらに向
ける。

だがしかし、今は授業中、優等生という看板の一欠片ぐらいは掲
げている僕としては、こんなことをするのは気が引け……シヨウガ
焼きに食らいついていた。

ハッ、身体が勝手に動いてしまった。

先生にバレないように口の動きを最小限にして肉を噛む、旨い旨
いぞー！

先生もどうやら気づいてないみたいだ。

と言うか、喋っても気づかなさそうなので、加藤にお礼を言うこ
とにした。

「シヨウガ焼き、ありがとう」

「いいってことよ」

「誰が作ったの？」

「俺だよ」

「マジ？」

「マジ」

「そうか……分かったぞ……こういう美味しい料理で小さな子を誘ってるんだな！？」

「まあ、手段としてはあるにはある」

「外道」

「誰が外道だ。手段としてはあるけど実行するには難しくないか？
今時料理で知らない人に付けてくる子なんているか？」

「むっ」

確かにそうかもしれない、中々顔だけじゃなく頭の回転も良いみたいだ、虫でもわいてるのかと思ってたけど。

「何か知らねえけど、失礼なこと考えてないか？」

「なっ」

こいつ、読心術まで、天は二物も二物も平気で与えやがるな、この、金髪ロリコンめ。

「……そういえば、今、痛ましい事件が起こってるよな」

悪口の嵐を頭の中で応酬していたら、加藤はふと、思い出したかのようにそう言った。

「ああ、あれか」

思い当たる節は、ある。

と言うか、結構全国的に有名になりつつある連続殺人事件、舞台は僕らが住むこの街。

最初は路上で死んでいた独り暮らしのお婆さんの死体を、ジョギングしていたおじさんが見つけたという在り来たりで使い古されたような事件だった。

ただ、殺され方が異常というか、死体を発見したおじさんもトラウマなりそうなくらいに異質だった。

顔の半分と腹を切り取られていたというのだ。

しかし、傷口はナイフや刀のような鋭利な刃物で切られたようなものではなく、まるで大きな獣に噛み千切られたかのように荒々しく、辺りに肉片が飛び散り、大きな血だまりができていたらしい。

が、ただの残酷な事件の一つとして、この事件もすぐに解決されると世間の皆さんも、僕も、そう思っていた。

しかし、それから三日も経たない内に女の子の死体が発見された。その死体は前の事件同様大きな獣に噛み千切られたかのように、右腕と右足を失っていた。

警察はこれを連続殺人事件と認定し捜査を開始したが、殺された二人には性別と殺され方以外は全く共通点はなく。

捜査が難航している内に次々に同じような傷跡の死体が発見された。

最初の事件から一週間、最初の遺体を含めて四体の死体が発見された。

要するに四件の殺人が行われた。

「確かに、あれは酷いな」

「ああ、幼い女の子を殺すなんて」

「ポイントそこ!？」

「いや、事件性そのものも酷いんだが、幼い女の子を殺すなんて、

百回死んでもいいぐらいだ！」

「んー、まあねー。でも、これだけの事件が自分たちの住む町で起こっても、僕らの生活って変わらないんだね」

こんな田舎町での凶悪事件、テレビ局が食いつかないはずがなかった。

凶悪な事件が起こり、連日テレビ局がこの町に取材に来ているが、それでもこの町は普通に動いている。

殺された人の遺族の方等、確かに生活が変わってしまった人もいるだろう。だけれども、この町の大多数の人間はいつもと大して変わらない日常を送っている。

僕だって学校から五時には学校を出て早く帰れと言う命令が下っただけで、そもそも帰宅部の僕には関係ない。

「確かにそう、だけど。事件は何処かで起きてるんじゃない、この町で起きてるんだ！」

「何だが聞いたようなセリフだ」

「自分で動かない限り、何も変わらない」

「弁当食いながら、無駄にカツコいいこと言うなよ」

雑談に雑談。

無駄なことをべちゃやくちゃ喋って、昼休みにはお弁当を食べて僕は無事学校を終えた。

家に帰ってとりあえず適当に、冷蔵庫に残っていた余り物でご飯を作る。

面倒な恩人キリコさんの分を合わせて二人分。

テーブルに料理を持って行き、先に座っていたキリコさんと向か

い合う席に僕は座り食事を開始。

「まあまあの出来ね」

「酷評だな」

「まあまあの返しね」

「そうでもなかっただろ」

当たり障りのない会話をキリコさんと交わしていると、点けっぱなしにしていたテレビから、学校で加藤との会話の話題に登った連続殺人事件のニュースが流れた。

どうやら五人目の被害者が出たらしい。

「ご飯時に嫌な物見ちゃったな。」

リモコンでテレビを切る。

もう、ヤダヤダ、ご飯食べてるのに、とぶりっ子のように頬を膨らませようかと試みようとしたものの、それは気持ち悪いなと思いつつ黙々とご飯を口に入れることにした。

しっかし、

「人間やったとは思えないな、この事件」

僕の一人言に対して、キリコさんが思わぬ返答をした。

「そりゃそうよ、アレは人間の仕業じゃないわよ」

「え？」

「あら、気づいてなかったの？ 犯人は私たちと同じ人外存在よ。そもそも、人間が一週間ぐらいの間で何の痕跡も残さずに五人もの人間を殺せないでしょ？」

考えてみればそうだ。

快樂殺人犯であろうと無差別殺人犯であろうと、人を五人殺した

ことのある犯罪者はいるだろう。

「だけど、同じ場所で証拠を残さずにたかだか一週間ぐらいの間で五人もの人を殺せるだろうか？ 多分、無理だろう。」

「でも、犯人が人外の存在っていう証拠は？」

「まず、傷痕。人間の腹や腕を噛み千切れるほどの力や牙を持つ動物がこの町に生息してるとは考えにくいわ。犯人が人間だとすると、ノコギリとかを使って死体を切ったとしても、荒い傷痕を残すのに時間がかかって、誰かに見つかるわ」

「でも、首を絞めて殺してから家に持って帰って、死体の腕とかを切断して、それを夜になってからばらまく、っていう方法だったら人に見つかることもないし、時間を幾らかけても大丈夫じゃないか？」

「貴方、ニューズ見てなかったの？ 肉片が辺りに飛び散っていて、大きな血だまりが出来ていたのよ？ 死体を切り取ったのはその場で行ったのよ。しかも、五つの死体全ての死亡時刻は発見された日の午前二時から二時半の間よ」

「ん〜」

五人の被害者を皆午前二時から二時半の間で殺し、死体を切り取ったのはその場でか、確かに難しい。

でも、

「でも、チェーンソーを使ったと考えたらどう？ その場で殺せるし、肢体も切り落とせる」

「だけど、そんな奴と出会ったら逃げるでしょ？ チェーンソーを持ちながら追いつけるかしら？ 死んだ人間の中には二十歳の男も居たのよ。活動的な二十歳の男を、チェーンソーを持って追いつき、その場で殺せるかしら？ 更に、殺された場所は全部見晴らしのいい河川敷や道路よ。それに、もう一つ、人外の存在と思われる箇所

があるの」

さつきからスラスラと、君は探偵かよ。

「どこ？」

「時間よ。全員の死亡時刻が二時から二時半の間、人外が存在が色めき立つ時間、要するに」

「丑三つ時、だろ？」

「そうよ」

一瞬で人を殺し、証拠を残さずに去り、犯行時刻は二時から二時半の間。

ふーん、確かにこれは人外が存在が犯人の可能性が高いな。

事件に納得し、ちょうど食事も食べ終えたので僕は食器洗いを開始した。

この時間、結構好きだな、食器の汚れと一緒に心の汚れも洗い落とせそうだ。

「ねえ」

僕の幸せ時間を邪魔する声が入り、食器洗いを中断し後ろを振り向く。

「今度は何？」

「貴方、犯人を倒さないの？」

「倒さないよ」

「貴方しかできないことよ、これは」

「だから、何？」

「貴方が倒しないとこの町の人間は次々死んでいくのよ？」

「そうなるだろうね」

「貴方、人間を助けようとか思わないの？」

「全く持つて思わないよ。だって他人がどれだけ死のうが知ったことじゃないよ。僕は僕に無関係なことには無視するって決めてるんだ。そっつたる？ テレビの中に映る戦争の映像を見たところで可哀想だなとしか思わないし、大多数の人は何もしないよ」

キリコさんはとても驚いた表情で僕を見ている。

僕を何だと思つてたんだよ。

僕は自分が生まれた町を命懸けで守る英雄ではないし、無償の愛で身体を張つて他人を助けるヒーローでもないし、困っている人に優しく手を差し伸べる聖人君子でもない。

僕はただの高校生だ。

僕は自分が生まれた町を命懸けで守るバカではないし、無償の愛で他人を助ける阿呆でもないし、困っている人に優しく手を差し伸べる偽善者でもない。

もう一度言おう、僕はただの高校生なのだ。

自分に無関係なことは全力で無視し、関係のあることは全力で取り組む。

英雄でもヒーローでも聖人君子でもバカでも阿呆でも偽善者でもない、普通に普通で普通な普通の高校生なのだ。

2 壊れる日常

翌日、朝のまどろみを吹き飛ばすように布団から飛び起きリビングに入った。

僕はソファアールの上で惰眠を貪っているキリコさんを尻目に、弁当と朝食を作る。

部屋に漂い始めた料理の匂いにつられたのか、キリコさんはゆっくり起き上がると、長い髪を手ですきながら眠そうな目をこちらに向ける。

「おらよう」

「どこの国の挨拶だよ」

目覚めと同時にボケるキリコさんに構ってる暇もないので、朝食にさっさと手を出す。

ノロノロと席に着いたキリコさんを見て、朝食を食べるのかな？と思ったのだが、キリコさんは朝食には手をつけずに何か言いたそうな顔をしながら僕を見つめているので、先手を打つことにした。

「何か言いたいことでもあるの?」

「うーん、貴方って、変わってるわよね?」

「どこが?」

「冷たい、というか、自分に無関係な事に対しては本当に無関心になれるじゃない」

「そんなもんでしょ、人って」

「違うわよ。連続殺人事件が何処か遠くで起こってるんじゃないよ、この町で起こっているっていうのに、貴方は本当に何事も無いように日々を過ごしてるじゃない。普通、少しは安全に気を配ったりす

るでしょ？」

「そういうものかな？」

テレビを点けると、昨日キリコさんと論議した連続殺人事件の二ニュースがやって来た。

どうやら六人目の被害者が出たらしい。

ふーん、六人目かー、大暴れだな。

食器を洗い置きに入れ、一旦二階の自室に戻り、制服に着替え、教科書を鞆に詰めて用意終了。

今日も元気に学校行くかー。

「行って来ます」

「行ってらっしゃい」

日々の日常は退屈で、平和ボケしているこのつまらない世界に嫌になって、よし、死のうつつで考えてる人が今まさに地球上にいるかもしれないけど、僕は退屈な日常もつまらない世界も大好きだ。

それはまるで、ゆらゆら揺れながらもバランスを取り続けるやじろべえのようで、悪意と善意がバランスよく整っている人間の如く、普通の日常と言うものはバランスよく成り立っている。

だからこそ、普通の人からしたらつまらないと思ってしまうんだ、自分と同じ性質を持つ者を嫌うように。普通の人には普通の生活からの脱却を大なり小なり望んでると思う。

だけど僕は普通が好きだ。ミロのヴェーナスは欠けてるから美しい、とかなんとか言った人が居た、よく言ったもんだ。僕はその人に尋ねたい。

じゃあ、最高級のリンゴがあったとしましょう。顔も知らない誰かがかじったそのリンゴを食べたいですか？ 地震で半壊した家は

好きですか？ 首のない死体は好きですか？

まあ、僕の質問は的外れかもしれない、だけど僕は、ミコのヴィーナスに腕がないからこそ数多ものパターンがあり、それが美しいという意見には賛成できない。ミコのヴィーナスの気持ちを考えたことがあるのか？ ミコのヴィーナスにも元の姿はあったわけだし、ミコのヴィーナスも元の姿に戻りたいと思ってるだろう。

つまり、何が言いたいかというと、バランスの取れた姿が一番美しく、普通が一番素晴らしく、学校に着くとクラスの空気が重く、女子は泣いていて、男子の何人かも泣いていて、僕の机の隣の机に花瓶が置いていて、僕の一番の友達、加藤用心の生涯は十五年で幕を閉じたということだ。

涙は出なかった。やっぱり僕は冷たいのかなと思う。

しばらくボーツとしてしていると、担任の先生が入って来て朝のホームルームが始まった。

先生は開口一番、「なぜ加藤が……」と言って、加藤が死んだ経緯を話してくれた。

どうやら加藤は連続殺人事件の六人目の被害者だったらしく、発見されたのは街中だったらしい。

先生が泣いていた。女子も泣いていた。男子も泣いていた。クラス全員が泣いていた。僕を除いて。

思考が上手く働かない、頭痛がする。視界がぼやける。自分の身体がゆっくりと傾いたのを感じた。意識が遠く離れて行く。

でも、何かが引つかかる。それを思い出せないまま僕は意識を手放した。

目覚めるとベッドの上だった。ここはどこだ？ と考えていたけど、鼻に入って来た薬品の匂いですぐに保健室だと判断する。

ベッドの周りに張られたカーテンを開け、ベッドから抜け出す。

身体は快調、精神は多分好調。

保健室の先生は外出中のようで、保健室には僕一人しかいない。時計を見れば五時間目が終わったぐらいの時刻だった。ここまで来たら授業はどうでもいいやと思い、僕は六時間目が終わるのを待ってから教室に戻った。

ドアを開け、中に入るとちょうど終学活をしてるところだったよ。皆が椅子に座ったまま僕に視線を向けてくる。哀れみ、同情、悲しみ、色々な気持ちがこもった目で僕を見る。ただ、皆に共通しているのは、加藤と仲の良かった僕が一番可哀想だと思ってることだ。

所在なさげに立っていた僕に、先生は席に座るように促した。自分の席に座ると、横には空席の加藤の席があった。それを見ただけで、少し頭痛がした。

前髪を鷲掴みにし、何かを思い出す。何かが、何かが足りない。何かがおかしい、可笑しい、オカシイ。て言うか、オカシイのは僕の頭か？　なんてことを考えていると、自然と口から笑みが溢れた。先生の声が遠く微かに聞こえてくる。どうやら、今日は通夜があるらしく、明日は僕らのクラスは公欠して加藤の葬式に出るようになってるらしい。

身近な人が一人死ぬ。たったそれだけでは何も変わらないと思っただが、日常は案外簡単に变化した。そりゃもう、殴打した粘土の如く。

皆が席を立つ音が聞こえた。いつの間にか終学活は終わっていたみたいだ。

僕の横を通り過ぎる生徒は、通り過ぎる際、僕に声をかけてくれるが、耳にノイズがかかったのように何を言っていたか聞こえなかった。

気づけば教室には僕一人しか居なかった。

ずっとここに居ても何も変わらないから、とりあえず学校を出ることにした。

まだ、六時といえど明るく、公園では小学校の高学年ぐらいの少年たちがサッカーに興じている。僕がベンチに座りながらそんな子供たちを見ていると、サッカーボールが足元に転がって来た。

「すいませーん。ボール取って下さーい」

まだ夏には入ってないが、もうすでに浅黒く焼けた肌の少年が仲間間の輪から抜け出し僕にそんなことを言った。

僕が少年にボールを蹴り返すと、少年は快活そうな笑顔を僕に向け、頭を下げると少年たちの輪に戻って行った。

空を見上げると太陽の光が目には刺さり、思わず目を細める。狭まった視界と長い前髪が現実逃避したい僕の背中を押しているように感じた。

「なあなあ、そろそろ帰らないといけないんだけど、俺」

「ん？ どしたん？ いつも七時ぐらいまで遊んでるじゃん」

「いやー、今すげえ事件あるじゃん？ あのせいで母ちゃんがうるさくて」

「そっか、じゃっ俺らも帰るか」

少年たちが公園を去る足音。僕の中で鳴った何かが嵌まる音。

何でだ。何で気づかなかったんだ。普通に考えていれば分かった。なのに今の今まで気づかなかったんだよ！

自分の頭の回転の悪さに嫌気が差して、頬を引っ掻く。染み出た血が僕の頭を冷やしてくれる。

もう三つ、気づいたことがある。

一つ目、近くの間人が死んだだけで気絶し、隣の席に花瓶が置いてあるだけで頭痛と吐き気を催す僕は普通の人に比べて脆すぎる。

二つ目、普通を望み、普通であろうとし、普通に生きようとする僕は普通じゃない。

三つ目、加藤が死んだだけで異常な僕の普通の日常は、めっきやめっきやのぐつちやぐつちやに壊れてしまった。そして、どうやってたつて僕の日常は元の普通の日常には戻れず、普通に戻りたいなら違う形の普通の日常を作り上げなければならぬ。

大丈夫、今日は数え間違えてない。

僕は椅子から立ち上がりうんつと背伸びをした。ボキリボキリとあちらこちらの骨が鳴る。脊椎動物の証拠だ。

よし、絶望は済んだ。後悔も済んだ。反省も済んだ。思考の調整も済んだ。勇気はリンリン。お腹はへりへり。鼓動はドクドク。心境はコワドキ。

覚悟は？

MAXだー！

動きますか、普通を取り戻す、いや、取り返すために。

僕はその日、加藤の通夜には出なかつた。理由は幾つかあるが、上げるとしたら、僕は人混みが苦手だし、加藤とはまとまった時間がある時にゆっくり話したいからだ。

だから、僕は公園を出るとすぐに家に直行した。確かめたいことがあつたからだ。

家に帰るとキリコさんはいつも通りソファーに寝転んで、テレビを見ていた。

「ねえキリコさん。聞きたいことがあるんだけど」

「何よ、そんな必死の表情して」

「殺された人の死亡推定時刻は二時から二時半の間だったんだよね？ 間違いないよね？」

「ええ、ずっと家に居るから何回も同じこと聞いているのよ、私。確かに、二時から二時半の間よ」

「そうか、でも、それじゃおかしいんだよ」

「何が？」

「被害者の中には小学生の女の子もいた。そんな子が深夜に外を歩くかな？ 寝つけなくて、夜風に当たろうとしたかもしれない、それは大人なら考えられる。でも、小学生の女の子が深夜に外に歩くことはおかしいんだよ」

キリコさんは少し驚いたような表情をする。

「確かに……そうね」

「で、僕は考えて、ある仮説を立てた。小さなノミのような脳ミソをフル活用して。犯人は、いや、響きは悪いけど犯人外と呼ぼう。犯人外は別に家の中で殺しても、どこで殺しても良かったんだと思う。だって、無差別にしかも色んな場所で殺してるんだから、殺人の対象も、殺人の場所も選り好みしてる節はない。じゃあなぜ、犯人外は被害者を外に呼び寄せた？ 自由に動けるんだったら、殺人方法が粗雑で殺す場所にも特にこだわりを持たないような奴が、わざわざ被害者を呼び寄せるなんてことしないだろう。否、呼び寄せる必要があつたんだよ。その場から動けない理由があつたのかもしない。ただ、これは僕の仮説だけ」

「……土地神」

「ん？」

「貴方の仮説が正しいとして考えると、犯人外はこの町に住む土地神よ。土地神はその土地に縛られていて移動制限があるの。自分が守る神社や寺院から遠くには行けないの、その土地の力を弱めることになるから」

「なるほどね。犯人外の目星は大体着いた。よし、キリコさん。明日から捜査に移ろう」

「……」

「どうかしたの？」

「いや、その、それは良いんだけど……」

キリコさんはモゴモゴと口を動かし、言葉を吟味をしながら目を泳がす。

「言いたいことがあったら言っていよいよ」

「……その、昨日はあんなに事件に関わるのは嫌がってたのにな、と思って」

なんだ、そんなことが。

「パズルのピースが足りないんだよね」

「どういうこと？」

「今日、パズルを粉々にされたんだ。しかも、ピースまで取って行きやがったんだ。このままじゃ全てのピースを拾い集めても、いくつかのピースが取られてるからパズルが完成しないんだ。だから、ピースを取り返してパズルを完成させるんだ」

普通を取り返すんだ。

3 容疑者

翌日、僕は加藤の葬式には向かわず、その公欠を利用して、キリコさんと殺害現場を点々としていた。殺害現場にはまだ赤黒い染みが付着している場所もあり、事件の凄惨さを物語っている。

陽射しが強い。額に流れる汗を手の甲で拭い、地図の殺害現場の場所に赤ペンで丸をつける。

「全部回ったけど、手がかりは……落ちてないわね」

辺りを見渡しながらキリコさんは言った。

「まあそんな上手くないよ。こうやって地図に丸を付けただけでもかなり絞れる。犯行現場を全部繋げていくと、少しいびつだけど円ができる。この円の中心か、中心近くの神社か寺に犯人外はいるはず……あれ？」

「どうしたの？もしかして、なかった？」

円の中心には神社も寺もない。だけど、そのすぐ近くに神社があった。あつたにはあつただけど……

「中心からほぼ等距離に二つ、東と西に一つずつあったよ」

「うーん、難しいわね。それ。一つしかなかったら問答無用で消しに行ったらいいんだけど……」

「問答無用で二つとも消すって言うのは？」

「駄目よ。悪行を行っている土地神を消しても特に影響はないけど、善行を行っている土地神を消したら土地に影響が出るわ」

「そうか。うーん、じゃあ事情聴取しますか」

キリコさんが居ると怪しまれるかもしれないから、キリコさんを僕の中に戻し、僕は階段を上っていた。なっ、長いな。

ようやく上り終えると、善島神社がその姿を表した。善島神社は山の中に佇む小さな神社だった。

鳥居をくぐり中に入ると、一人の背の低い少年が空を見上げ立っていた。腰まで伸ばした白い髪の手先をくぐり、美少年と言っても差し支えない顔立ちの白い着物を着た少年。だが、少年の体は淡く光っている。

あれが、容疑者だな。

僕の視線に気づいたのか、少年は空を見上げるのを止め、僕を見る。数秒の間、少年と見つめあっていると、少年は目を見開き僕に近寄って来た。

「あの、失礼ですが、僕が見えますか？」

「うん」

「あつ、え、そうなんですか！？ いやー、僕が見える人と会うのは久しぶりなんでどうしたらいいか……」

少年は頭を掻いて照れ笑いをする。

「まあ、とりあえず、名前を教えてください？」

「あつ、そうですね、では」

少年は一步下がり、軽く咳払いをする。

「はじめまして。僕はこの善島神社の神、雅織まひしきです」

ペコリと、ちょうど九十度くらいまで雅織くんは頭を下げた。

こんなに頭を下げられる経験は初めてだ。偉い人になった気分だ。それじゃ、事情聴取、開始しますか。

上体を起こした雅織くんは僕は声をかける。

「ときに雅織くん」

「はい、なんででしょう」

「今、この町で起こってる事件について知ってるかな？」

「ええ、もうすでに六人の人が亡くなっているんですね。しかも、皆僕の神社に来た人だ」

「そうか、知っているか、それでね……って、え！？　今なんて！？」

いきなり大声を出したからか、ビクリと雅織くんは体を震わす。

「いや、あの、僕の神社に来た人が皆亡くなっているんですよ」

……：どういう意図だ？　なぜわざわざ自分から言った？　自分を容疑者として外すためか？　いや、僕はまだ犯人外を探してるなんて言っていない。それじゃありスクが高過ぎやしないか、何も知らない人から見たら犯人外としか思えない言動をなぜ、今したんだ？

「雅織くん。その言葉は殺したのが雅織くんのように思えるから、止めといた方がいいよ」

「え？　そうなんですか？　忠告ありがとうございます。でも、僕は嘘をつけない神なので、聞かれたら言ってしまうんです」

「嘘をつけない神？」

「はい。僕は嘘をつこうとしても言葉が出ないんですよ」

「へー、そんな神がいるんだ」

「不便ですけどね」

「嘘をつかないことは良い人、良い神の証拠じゃないか」

「そうかもしれないですけど、時には嘘をついて隠したい本心がありますよ」

「……ねえ、雅織くん」

「はい」

「もしかして、六人の人を殺したやつを見たことない？」

「はつきりとは見てないんですけど、大きな獣の姿をしたものが、この神社の前を通りすがったのを見たことが一度だけあります」

大きな獣の姿をしたもの、ね。

「よし、ありがとう。じゃあ、僕は行くね」

「どこにですか？」

「芯隠神社に」

「あそこの神に聞いても無駄ですよ」

「なんで？」

「彼は天の邪鬼だから、僕と違って嘘しかつけない」

「それでも、まあ、行ってみるだけ行ってみるよ」

雅織くんが背を向け、階段に向かおうと数歩進んだ時、

「あの一！」

雅織くんが僕を呼び止めた。

「うん？」

僕は振り返り雅織くんと向かい合う。

「あの、あなたが六人の人を殺した犯人を探しているとしたら、絶対捕まえて下さい！僕は、僕は許せないんです。願いを叶えるた

め、こんな小さな神社に足を運んでくれた方々を殺したやつが、心の底から願っていたあの人たちを守ることも、願いを叶えることもできない自分に」

雅織くんは流れ出る涙を袖で拭いながら、なおも続ける。

「お願いです。犯人を捕まえて下さい！」

「全力は尽くすよ」

長い階段を下り、次の目的地を地図で調べながら向かっていた途中、どこからか来た線香の香りが僕の鼻腔をくすぐった。一週間の内に死で溢れた町、町のどこかでいつも葬式をやっていた。でも、なんとも思わなかった。葬式の際に掲げられた看板を見ても、どうにも思わなかった。どうにも思わなかったはずなのに。

今、目の前にある看板を見た瞬間、体が揺らぐ、心がざわめく。ただ、『加藤』という文字が書かれているだけの板に対して恐怖を抱き、僕は早くその場所を立ち去りたくて駆け出した。

まだ、現実を受け入れるには時間がかかるのか。

ある程度走ったところで走るのを止めた。

さっきの雅織くんの顔が思い出される。涙をボロボロと流し、僕に懇願した神の姿。

芯隠神社はビルとビルの間路奥のひらけた場所にあった。僕の胸ぐらいの高さの大きさで、その両脇に誰が入れたかは分からないけど、花瓶に花が供えられていた。第一印象は不気味、だった。場所自体も湿気が多くじめじめとしているのもあると思うけど、それ以上にその小さな神社自体から何か禍々しい力が漏れ出しているような気がする。

「何しに来たんだ、お前」

何処からか一匹の黒い狛犬が現れた。いや、こいつは神か。

「いや、少し事情聴取に。あなたはここの神ですか？」

「ちげえよ」

ここの神じゃないのか？ いやいや、確か雅織くんがここの神は天の邪鬼なんだから、言ってることは嘘なんだから、こいつは神か。てか、こいつが犯人外じゃない？ でっかい狛犬だし、人なんて力ブリッでしょ。

「名前を教えてくださいませんか？」

「逆さ神」

「じゃあ、逆さ神さん、一週間ぐらい前からこの町で人が死んでい

ることを知っていますか？」

「知らん」

「殺したやつを知ってますか？」

「一週間ぐらい後に、人の姿をしていない奴が通りすぎるのを見ない」

……一週間ぐらい前に人の姿をした奴が通りすぎるのを見た。でいいのかな？ ああー、めんどくさい。

「人の姿をしてたんですか？」

「いや、してなかった」

雅織くんと言っていることが違うというか、雅織くんは犯人外が大きな獣の姿をしていたと言い、この神は人の姿していたと言い、

まるで互いが互いを犯人外にしようとしてるみたいだ。

「君が殺したんではないんですね？」

「いや、俺が殺した」

殺してないつと。

まあ犯人外だったら自分からは名乗り出ないよね。

「殺した奴に心当たりはありますか？」

「ない」

あるのか。

「誰ですか？」

「善島神社の雅織って野郎ではない」

「と言っわけなんだけど」

「ふーん」

今日の出来事をキリコさんに話したが、キリコさんはせんべいをかじりながら僕の話の流れし聞き。

しっかし、どうなんだろうな、嘘をつけない雅織くんと嘘しかつけない逆さ神。

「まるで正直村の話みたいだ」

「何よそれ？」

「あれ、知らない？」

「知らないわよ」

「キリコさん知らないんだ」

有名なものになら。

少しバカにして言ったら随分と不満そうな顔をして、せんべいをフリスビー代わりに投げつけてきた。

「いいから教えなさいよ！」

「おっと」

せんべいを避け、キリコさんに向き直る。これ以上バカにすると本気で切れそうなので教えることにしよう。確かねー

「ある旅人がいました。旅人は正直村に行きたかったのですが、その道中に別れ道がありました。旅人はどちらが正直村への道か分からず、近くにいた一人の村人に質問をすることにしました。ただ、その人は正直村の村人か、嘘つき村の村人かは分かりません。正直村の村人は正しいことしか口にせず、嘘つき村の村人は嘘しかつきません。旅人は村人にどんな質問をすれば正直村に行けるでしょうか？ って話だったよ」

「地図を見ればいいじゃない」

「それを言ったら終わりだよ。じゃあ、あれだ。道具使うの禁止」

「じゃあ、お手上げ」

「早いよ！ もうちょっとマジで考えなよ！ 案外簡単だから」

「もういいじゃない、答え」

キリコさんは答えを寄越せと人差し指をチヨイチヨイ動かす。

ため息しか出ない、この横暴魔神が！ 僕の気が短かったらもう殴ってるぞ。

「……あなたの村に連れてって言えばいいんだよ。正直村の村人なら正直村に連れていくし、嘘つき村の村人なら自分の村とは違う村、つまり正直村に連れて行ってくれるんだよ」

「ふーん、でもそれおかしくない？」

「何が？」

「嘘つき村の村人だとしたら、自分の村と違う村ならどこでもいいんでしょ？　なら、正直村じゃなくて撲殺村や首絞め村に連れて行くかも知れないじゃない」

「ぐっ」

確かにそうだけど、他の村の名前、不吉過ぎない？　A村、B村でもいいだろ。

「まあでも、確かに似てるわね。嘘つきと正直者」

「だろ？」

「互いが互いを犯人外と言ってるのね。まっ、明日も事情聴取、頑張ってる」

「……」

楽しやがって。

キリコさんとの会話を終え、ベッドに潜る。

今日は疲れたな。色々歩き回って、話まくって、骨を粉にして働いた。

さあ、明日は学校か。

もう、あの空席を見ても体調は崩さないと思うけど、僕は普通を取り返せるのか？　このごろ僕が考えてるのはこんな事ばかりだ。

普通の日常、普通の生活、普通の学校、普通の友達、普通の家族、普通普通普通普通普通、普通、普通、普通、普通、普通？　普通って何だ？　僕は自分を見失う。自分が僕から抜けていく。空っぽの僕、中身のない僕、早く僕の中身を埋めないと、僕は僕が分からなくなる。

分からなくなる前に、僕は暗闇に落ちていった。

4 遺影

翌日、また一人死んだ。

ただ、今までと違った点が一つあった。死亡推定時刻が二時から二時半じゃなく、一時から二時の間という点だった。

「ただの通り魔かしら？」「違うよ。しょうもない小細工、つまりない足掻きだよ。これをして人外が殺したのではなく、人が殺したことにしたかつたんだろ。でも、短絡的過ぎる。人外は昼間は活動できない、なんてことはないし、逆に僕が彼らに接触したその日の内に仕掛けて来たんだ。確実にあの二人の中に犯人外はいるよ」

食器を片付け、部屋に戻り制服に着替えを済ます。

全く、僕をバカにするなよ。

イライラを発散するため少し乱暴に鞆に教科書などを積める。

あんな子供騙しで僕を騙せると思ったのかよ。

登校時刻ギリギリに学校に到着。何で坂を上りきった所に学校建てるんだよ。万年帰宅部の僕には凄くしんどい。

教室に入り、自分の席に座った。鞆の中の教科書を机の中に入れて、ふと、下げていた視線を上げると、クラスの皆が僕を見ていた。嵐のように降り注ぐ視線、どうしたものかと思案していると、名前を知らないクラスの女子が一人、僕の席の前に立ち、思い切り僕の机を叩いた。

「……………何で……………昨日のお葬式、来なかったのよ」

俯いたまま言った彼女の一言で、僕はこの視線の正体を知った。
嫌悪、そういう名をした視線だった。

黙っている僕に耐え兼ねたのか、目の前の彼女は僕の胸ぐらを掴んだ。

「どうして来なかったのかって聞いてんのよ！ あんた以外皆来てたわよ！ どうして来なかったの!？」
「どうしてって……言われても、ねえ」

言っても意味ないし、信じることなんて、できないだろう。
ただ、その瞬間、さっき放った一言が彼女の地雷を踏んでしまったのか分からないが、彼女は僕の頬をビンタした。

「何でそんな無表情なのよ！ 何で何も感じてないの!？ あんた頭おかしいんじゃないの!？ もしかして、もしかして……」

嫌な予感が通り過ぎた。

そしてその予感通り、次に放った彼女の一言は僕をキレさせるのに充分だった。

「あんたが加藤くんを殺したんじゃないの!？」

「……は？」

「そうよ、加藤くとあんた仲良かったじゃない？ なのに、そのあんたが加藤くんの葬式に来ないなんておかしいわよね？ この連続殺人事件の犯人はあんたじゃないの!？」

この女、何勝手なこと言ってるんだ。加藤の葬式に行かなかっただけで犯人扱いか？ 僕が、僕が、加藤を殺したって言うのか？ 黙れ、黙ってくれ、そんなクソみたいな言葉を吐くな、空っぽな頭

を見せつけるな、幼稚な推理を始めな。

こいつ、殺してやるのか？ 撲殺、刺殺、銃殺、絞殺、焼殺、虐殺、圧殺、封殺……

左腕を上げ、窓にその腕を叩き込んだ。大きな音を立てガラスは砕け、女は僕の奇行に驚いたのか、一瞬で黙った。危ない危ない、マジで殺すかもしれない。

太い血管は切らずにすんだが、血塗れになった腕を引き抜き、ほっと一安心。皆が呆然として僕を見ている。さっきとは違う視線。異常なものを見る視線。どうやら僕の奇人レベルは上がったみたいだ。タララララララッラ。奇人レベルが五レベルはね上がった。視線集中を会得した。

大きくため息をつき、教室を出る。僕の日常生活、早く取り戻さないと大変なことになりそうだな。日常が、と言うよりは、主に僕が。

ガラスに手を突っ込みという、DMもびっくりの超DM行為を犯した後、僕は保健室に行かずに、早退することにした。所謂サボりだ。

学校を出た僕は雅識くんがいる善島神社に向かった。

ガラスに突っ込んだ腕の傷は大分癒えていて、この時ばかりはキリコさんと契約して人外存在になっておいて良かったな、と思う。

まあそんなこんなで、色々考え事をしていたら、いつの間にか善島神社に着いていた。

鳥居を潜り、雅識くんの姿を探して見るが見当たらない。どっか出かけてるのかな？

話を聞こうと思っていた雅識くんが居ないので、善島神社の周りをグルリと回ることにした。

木々に囲まれた神社。雅識くんには悪いけど、見れば見るほどボ

口く見えてくる。

神社から視線を外すと、沢山の絵馬が目の前に現れた。ぶつかるギリギリのところでは僕は足を止める。危ない、危ない、気づかずにぶつかって色んな方々の夢を壊すところだった。

そのまま、神社観察を続けようとした時、ふと、視界の隅に見慣れた名前が書かれた絵馬があった。加藤用心と書かれた絵馬があった。それ以外にも見慣れた名前があるな、と思って見てみると、全て連続殺人事件の被害者の名前だった。今日の朝、死んだ人の絵馬もあった。他にも数十枚、古ぼけた絵馬があり、中にはその絵馬を書いた年が書かれた物もある。

これはこれは、手がかかりだね。

鞆からメモ帳を取り出し、絵馬に書かれた年を書き写した。

それから、数十分ほど待ったが、雅識くんが現れないので僕は帰った。

「キリコさん、犯人が分かったよ」

「あら、良かったじゃない。で、どうやって聞き出したの？ 正直と嘘つきから」

「いや、まずそこから間違ってたんだよね。嘘つきは雅識くんの方で、逆さ神さんは本当のことを言っていたんだよ」

逆さ神さんは天の邪鬼だが、本当のことを言っていた。逆さ神さんの言っていたことの反対は全部本当だった。……ややこしい。

まあ、でも、本当のことしか話せなくても嘘はつけるし、逆に事実と反対のことしか話せない方が、嘘をつきにくい。

「要するに」

「雅識くんが犯人」

「証拠は？」

「雅識くんの神社に絵馬があっただけだよ、殺された全員の名前があっただよ。他にも、昔に書かれた絵馬があつて、絵馬に書かれたいた年に起きた事件のことを図書館で調べてみたんだよ。そして、その年に今回と同じような事件が起きていたんだ。数年ごとに一人づつ、ぐらいだけど」

「じゃあ、行きましょう」

ソファから立ち上がるうとしたキリコさんを、手で制す。

「待つて」

「何？」

「明日にしよう」

「何ですよ？」

キリコさんはすっごい怪訝な顔で僕を見る。

「今日、雅識くん居ないっばいからさ、それに、僕やりたいことがあるんだ。雅識くんを倒す前に」

「……そのやりたいことは譲ることができないものなの？」

「譲る譲らないじゃなくて、譲れないよ。こればかりは」

キリコさんは膨れっ面をして僕を睨む。いつもなら僕が折れるが、今回だけは負けられない。

根気よく睨んでると、キリコさんは呆れた様にため息をつき、ソファに寝転びそっぽを向く。

「貴方、変なところで頑固よね」

「褒め言葉？」

「皮肉よ」

翌朝、起きたのは三時。午前三時ではない、午後三時。普段ならば遅刻だが、大丈夫！ 今日には休日。熟睡したお陰で僕は充実。

うんつと伸びをし、庭でバットの素振り。

一汗かいてシャワーを浴び、バットを袋に入れて肩に掛け、僕は家を出た。

向かう先は加藤の家。

加藤の家に行くのは四階目だった。以前見た時と変わらず、結構な大きさの家。要するに豪邸だった。

インターフォンを押すと、インターフォンにカメラでも付いてるのか、インターフォンに出ずに、加藤の母親、百合子さんはドアを開けて僕を迎えた。

「久しぶりね」

「お久しぶりです。今日は加藤の」

「入っていいわよ」

僕が言い切り、礼をする前に、百合子さんは僕を家に上げた。

「こつちよ」

百合子さんの後に続いて行くと、襖が現れた。

「ここに居るの」

百合子さんがゆっくりと襖を開ける。そこには二十畳ほど畳張りの座敷が広がり、奥には加藤の遺影があった。

「帰る時は何も言わないでいいから、好きだけ喋りなさい」

そう言っつて百合子さんは僕に微笑み、座敷に僕を残して去った。葬式に来なかつた僕に向けたやつれた笑顔、傷んだ髪、細くなつた身体、それだけで、それだけで、百合子さんの優しさが、強さが痛いほど分かつた。

線香を上げ、遺影の前に正座し、僕は手を合わせる。

今、加藤の死と僕は向き合つてゐる。もう、最初の頃のような嘔吐感も、頭痛もしない。ただ、虚しさは、空しさは、空虚さは最初も今も一緒だつた。

「なあ、加藤」

話しかけてみた。

彼が生きてる時に、僕から話しかけることはなかつた。

「普通つて何だと思つ？」

問いかけてみた。

彼が生きてる時に、僕から問いかけることはなかつた。

「僕は今、自分が分からない、普通が分からない。普通でいたいのに、自分でいたいのに、普通の自分でいたいのに、分からないんだ」

さらけ出してみた。

彼が生きてる時に、僕からさらけ出したことはなかつた。

どれもこれも、返答なし。当たり前だ。消えたんだ。加藤用心は死んだんだ。

「僕さー、今から君の敵討ちしてくるんだよ。そいつを倒したら、

僕は普通が戻ってくると思うんだ」

敵討ちって言葉、僕ほど似合わない奴はいないな。

無関係なことには無視して、関係あることは全力でことにあたる。聞こえは良いけど、ただの卑怯者だ。

世界から自分を切り離して、自分のことしか考えず、自分に与えられる影響を心配し、全ての行動が自分に良いようにがるように計算し、メリットデメリット、損得勘定でしか行動出来ない。

優しさも、愛も、慈しみも、善意も、全て他人に与えるのは、自分を好んで欲しいから。

悪意も、憎悪も、殺意も、嫌悪も、全て嫌いな人間に与えるのは、自分を嫌って欲しいから。

ワンマンプレイならぬロンリープレイ。オンリーワンならぬロンリーワン。孤独に孤独で孤独な孤独。故に一番。当たり前が一番。自分が一番。

だから、人が死んでも涙を流さない、流せない。

「加藤が死んでも涙を流せない」

何故なら、どれだけ親しくても結局は他人で、死ぬのが自分でなくて良かったと、心の隅で思ってしまうから。

近しい人が死んでも、そう思ってしまう。

「僕は、異常だよな」

今、この瞬間も、僕はひどく冷静で冷酷な顔をしているのだろう。息を吸う。息を吐く。こんな僕にも平等に呼吸は許される。

「よしー」

自分の頬を叩き、現実逃避していた脳を引き戻す。

「ごちゃごちゃ考えても仕方ない、考えるのは後だ。やるべきことをやってから、好きなだけ考えよう。」

僕は立ち上がり、襖を開け座敷から出た。

襖を閉める時、襖の隙間から笑っている加藤の遺影を見た。

「じゃっ、ちよっくら行ってくるよ」

5 真の嘘

夜が来た。僕の、僕たちの時間だ。

とても心地いい夜風を体に浴びながら、善島神社の長い階段を一段ずつ踏みしめる。

この足は誰の足だ？

僕の足だ。

この腕は誰の腕だ？

僕の腕だ。

この頭は誰の頭だ？

僕の頭だ。

何者にも騙されるな、何事にも惑わされるな、舌先三寸は舌ごと喰らい返せ、口先だけのハツタリ野郎は僕一人で充分だ。

階段を登り終わると、境内の真ん中で雅識くんが空を見上げ立っていた。

僕が雅識くんに近づくと、雅識くんはゆっくりとこちらに顔を向けた。

「こんばんは」

「こんばんは、雅識くん」

「どうしたんですか？ バットなんて肩に担いで」

「ん？ これはね〜」

と言って僕はその場で素振りをした。

バットの風を切る音が場の雰囲気を変化させる。

「お仕置きしなくちゃいけない奴がいてさ。まあ、何て言ったらいいのかわからないけど、撲殺用のいわゆる鈍器ってやつだよな」

「へえ、あなたを怒らせるなんて、失礼な方ですね。ホント」

「ああ、本当に失礼な奴なんだよな。本当のことしか話せないとか言っつて、ガンガン嘘を吐いてくる奴なんだよ」

「それは最悪ですね。誰なんですか？」

「全く、その通り、最悪な奴なんだ。そして、そいつの名前は」

大きく一步踏み込み、雅識くんをバットの射程距離内に入れる。

不意打ち気味に振るつたバットは彼の側頭部に炸裂した。

雅識くんは横に吹き飛び、僕の腕に程よい痺れが残った。やっぱり、あんまり良いもんじゃないな、何かを撲るつて言うのは。

「……だから、嫌いだ」

雅識くんはゆっくりと立ち上がり、最初に僕に見せた無邪気な目とは全く違つ、怨みがましい目で僕を見る。

「だから、人間は嫌いなんだ。自分は好き勝手に嘘をつくくせに、僕らにはそれを許させない」

背筋に何か冷たい感覚が伝つ。舐めちゃ駄目だ。こいつも神なんだ。

雅識くんの髪の毛が逆立つ。

「僕らに勝手に望んで、死んだ人間を生き返らせれるか？ 失つた手足を元に戻せるか？ 日照りのせいで水不足の畑に雨を降らせるか？ 人の心を変えられるか？ 人の頭を良くできるか？ 無理だろ？ 無理だよな？ 無理に決まってるだろ！？ 高位な神ならまだしも、土地神程度にそんなことできるかよ！ そんな力あるかよ！ それなのに、僕らに勝手に期待しやがって」

雅識くんの爪が鋭く尖り、赤く長い舌が鋭い犬歯の間から現れる。

「君が何百年、何千年前から生きてるか知らないけど、僕から見たら君は……ただの我が儘なガキ、だ」

駄々をこねてる子供だと言うことだ。

「てつめえ！」

雅識くんのいた地面が爆ぜたと思った時には、雅識くんは両手を組み合わせて作った拳を振りかぶり、飛び上がった。いた。

ギリギリのところでは僕はそれを横つ飛びしてかわす。

そうだ怒れ怒れ、普通に戦ったら僕に勝ち目なんてない。怒れば動きは単調になり、僕でもかわすことができる。

僕が態勢を立て直したと同時に、雅識くんは一直線に僕に向かって駆け、鋭い爪を持つ右腕を振り上げる。が、僕は慌てずその右腕をバットで下に叩き、空いた側頭部をバットで撲った。

ふらついている雅識くんを、すかさずバットで何度も殴打する。今を逃せば、いつ形勢逆転されるか分からない。撲る撲る撲る撲る撲る。もう一撃加えれば、倒れそうな雅識くん最後の一撃を加えようとバットを振り上げた時、横から強い衝撃が襲った。

と思うと、僕は宙を舞っていた。

重力が体にかかり、回転しながら地上に辿り着いた。身体中を痛みが襲い、着地するさい、嫌な音がした右腕が痺れたようになって指を動かせない。

ふらふらする頭を左手で押さえながら、さっき僕が立っていた場所を見ると、雅識くんの隣には黒い狒犬、逆さ神がいた。

前提が間違っていた。

嘘つきは逆さ神さんでも、雅識くんでも、なかった。

どちらがどちらとも真実を言って、また、嘘を言っていた。真実の嘘、嘘の真実。この二人は共犯だったのか。

逆さ神さんは僕をちらりと見てから、雅識くんの方を向く。

「こんな奴に勝つなよ」

「すいません」

「俺たちの恨みを晴らさないんだろ？」

「……はい」

「じゃあ、ずっとこいつを殺すなよ」

「早く殺せってことですよね」

逆さ神さんが来たせいで、雅識くんは冷静さを取り戻した。

僕は最後の希望を持って、タバコを出して火を点け、名前を呼んだ。

「キリコさん」

「はい、呼ばれて、飛び出て」

キリコさんは煙から現れると同時に、二人に飛びかかっていった。

「キリコ」

「邪魔じゃない」

逆さ神さんの一撃を受け、キリコさんは何もすることができずにかき消された。

そうだ、元々キリコさんはやられることはないが、戦闘能力は皆無だったな。

ゆっくりと二人の神は僕に近づいてくる。

ボロボロの雅識くん一人なら、何とかかなりそうだけど、逆さ神さんもいるとなるなら話は別だ。

万事急須、最悪で最低な状況だ。打つ手なし。

二人は僕の前に立ち止まる。

「最後に何か言いたいことはありませんか？」

完全に冷静になった雅識くんが僕に問う。

「実行犯はどっちなんだ？」

「ほぼ、逆さ神さんです」「人を殺した時、心は痛まなかった？」

「いえ、」

雅識くんは冷えきった視線で僕を見ながら言った。

「全く」

逆さ神さんが腕を振り上げた。

僕は目を瞑った。

大きな音が起こった。

ああ、僕は死んだのか、案外痛みは訪れないんだな。キリコさんは人間の魂は未練がないとすぐ消滅するって言ってたけど、僕はどうなんだろう？

ん？ てか……あれ？ もしかして僕、生きてるのか？

目を開けると、二人の神の代わりに一人の亡霊が立っていた。

生前と変わらぬ金髪、中性的な顔、高い身長。

変わったのは、体が青白く光っていることだけだった。そんな、死んでるか、死んでないかの違いなんてどうでもいい。

目の前の彼は僕を見た。

「久しぶり加藤」

「おう、お前のアイドル兼幼女向け紳士、俺だぜ」

「くだらないね」

「全くだぜ」

加藤は笑った。

僕も笑った。

6 普通の日常

「あいつは俺に任せてくれよ、俺はあいつに殺されたんだ」

加藤は逆さ神さんを指差し、見て分かるくらい深く息を吸い込むと、駆けて行った。

痛みが消えた。

正確には痛みが僕を感じる痛覚の向こう側に行ってしまったような。体はボロボロだけど、精神はフワフワと高揚しているような感覚。

「キリコさん、加藤を手伝ってあげて。多分あいつは……」

「あの狒犬に殺された恨みで残ってるんでしょうね。任せて、やれるだけやってみるわ」

キリコさんは空中をスライドするような動きで、逆さ神さんに飛びかかっていった。

バットを杖にして立ち上がる。

目の前には、僕と同様にボロボロな雅識くんがいる。真っ赤に充血した目で僕を見つめる。

僕は雅識くんに近づきながら言った。

「これで、対等だね」

「ハッ！ 人間と神だ。対等じゃない」

「いや、対等だよ。僕はもう、人間じゃないんだよ。片足はもうこっちに突っ込んでんだ」

鼻と鼻とが触れあいそうなほど近くの距離に近づくと、僕はバツ

トを捨てた。

左の拳を握りしめる。

「あんまり、舐めるなよ」

僕が拳を振るうのと同時に、雅識くんも拳を振るった。どちらも避ける分に割く体力はもう無いのに気づいてる。だから、後はもう、殴るだけだ。

僕の拳が肉を打つ感覚を捉えると、僕の体は肉を打たれた感覚を捉える。

打たれた痛みは一瞬だけど、じわりじわりと毒のように疲れた体を蝕む。

足はその場に踏ん張るのがやっとで、頭は意識を繋ぎ止めるのに必死で、拳は雅識くんに振るうので手一杯。それは、雅識くんも同じはずなのに、雅識くんは笑っていた。何故だ？

「ハハハハハハ。貴方、バカですよ。勝てる訳でないでしょ！
貴方、右腕折れてますよね！？」

ああ、だから、雅識くんは笑っていたのか。

「どちらも満身創痍と言っても、貴方は片腕一本、対する僕は両腕二本。この差はただ二倍と言うに」

「黙れ」

僕の右腕が雅識くんの顔面を殴りつけた。

右腕が激しく痛んだが、雅識くんは僕が右腕を使わないと思って
いたのか、思い切りいいパンチが入り、雅識くんは倒れた。

「……………何で？」

「雅識くん、君は間違いを二つしているよ」

立ち上がる力ももうないのか、雅識くんは僕が近づくと度々座ったまま後ずさる。

僕は雅識くんの胸を足で踏みつけた。

「一つ、右腕を使っていたのは、これ以上使ったら治るのが遅くなるのが嫌だからだよ」

雅識くんが僕の足首を掴むが、僕の足を退かすことはできない。

「そして、もう一つは」

雅識くんの手を払いのけ、僕はできるだけ、高く、高く、足を上げた。せめて、雅識くんに殺された人々が見えるよう旗印にするため。

「ごめん……一つだった」「助けてくれ！」

僕はその足を振り下ろした。足は雅識くんの鳩尾に入った。

ここで限界が来たようで、僕は倒れ込むようにしてその場に座る。雅識くんは血を吐き出し、僕を睨むつける。

「何でだ……何で……僕が」

その目からは涙が流れていた。

「僕だって……最初は頑張ったんだよ？ ……皆知らないかもしれ
ないけど……必死に頑張った……必死に努力したんだ……願いを……
叶えようとしたんだ……なのに……僕の努力は……人間には見え

ない……でも、人間は願いが叶わなかったら……僕を恨んだ。人間は……我が儘だよ」
「全く持ってその通りだよ。でも、だから人間を殺すってのは違うよ」

僕がそう言うと、雅識くんは僕から目を逸らし、空を見上げた。

「……僕は間違っていたんですかね？」

「それは僕には答えられないよ。間違っているか、間違っていないか、それは君の価値観で判断してくれ」

「……なら、一応間違っていないことにします。自分を一番信じないといけないのは……自分なんです。……一つ話を聞いてくれませんか？」

「自由」

「……僕は神や人間や植物や動物じゃなく、空になりたかったです」

「……空？」

「はい……空は存在することが……忘れられがちです。……でも……記憶の片隅には……誰もが空のことを覚えてます。……ある人は突き抜ける青さに……心地よさを覚え……ある人は……雨の冷たい水気に……潤い覚え……ある神は……空の広さに高さに……優しさを覚え……その記憶は一生消えませんが」

雅識くんの体が青白い光の粒に包まれ、粒はだんだんと空に飛んで消えていく。

「今だって……空が僕を見てくれます。……空は、優しいなあ」

「……」

「……すみません……さっきの言葉……訂正していいですか？」

雅識くんは僕の顔を見た。何も言えずにいる僕の姿を了承を捉えたのか、雅識くんは光の粒の中で言った。

「やっぱり、僕は間違っていたかもしれませぬ」

雅識くんは消えた。

最後、消える一瞬、雅識くんは安らかな笑顔だった。本当に幸福そうでした、同時に、本当に不幸そうなの、そんな笑顔だった。

ふと、空を見上げると、雅識くんとは別の、黒い光の粒が空を舞っていた。

「倒したのか、お前も」

「君も倒せたんだね」

「ああ、あの女の子の手助けもあってな」

気づくと、加藤が横に座っていた。

「何で僕がここにいるって分かったんだよ」

「お前、俺の遺影の前でくっちゃべってただろ？ そこから後ろからついて行ってた」

「……そうか」

何を話せばいいか分からず僕が黙っていると、加藤の体が光の粒に覆われ始めた。

「俺はあの狛犬を倒したから、目標達成。成仏って感じかな」

さして慌てる訳でもなく、まるでこんなこと生きていた時から知っていたように、加藤は軽い口調で続ける。

「で、お前はどうなんだよ。目標達成できたのか？」
頭の中に広がる。

雅識くんの無邪気な顔、楽しそうな顔、泣きそうな顔、怒り狂った顔、獣のような顔、安らかな顔。

「分からないんだ。僕は彼らを倒したら、いつもの普通が返ってく
ると思ってたんだ。でも、今、何も変わらない。本当に何も変わら
ない」

むしろ、変な虚無感が心に染み渡っただけだ。

「僕は、異常なんだな」

「んー、別にいいんじゃないね」

加藤は頬を書きながら、僕に言う。

「異常でも、普通でも、天才でも、何でも。誰だって自分の日常が
あって、昨日と同じように今日は過ごさないし、そもそも過ごせな
い。そして、今日と同じように明日を過ごすことも不可能だ。一日
が一日が変化して、日常は作られるんだ。日常に普通なんてものは
ない。まあ、俺の考えだよ」
「でも」

僕が言葉を発そうと口を開くと、加藤は僕の唇の前に人差し指を
立て、僕を黙らすように大きな声で言った。

「でももし！」

加藤は人差し指を立てていた手で僕の頭を掴む。

「でも、もし、お前が普通の日常はあるって言うなら、俺はこっ答えよう。一般人だろうが、天才だろうが、王様だろうが、奴隷だろうが、貴族だろうが、娼婦だろうが、兵隊だろうが、総理大臣だろうが、大人だろうが、子供だろうが、男だろうが、女だろうが……異常だろうが……そんなもんが何で普通の日常を過ごしてはいけない理由になるんだよ。誰が罰するんだよ。今、お前を罰してるのはお前だろ。異常だとかなんとか、くだらない理由で自分で自分の首を絞めてるんだ。少し、自分に優しくなれ」

加藤は僕の髪をかきむしる。

もう加藤の体は全て光の粒に覆われ、後は顔だけだった。

「じゃな、俺の友達」

「バイバイ、僕の友達」

加藤は笑った。

僕も笑った。

そして、加藤は消えた。

「ありがとう、僕の親友」

しばらく横になった後、僕は立ち上がった。まだ身体中の色んなところが痛い。でも、前みたいにキリコさんを呼び出して肩を借りることはしなかった。男のプライドとか、そんなんじゃないくて、ただ単純に僕の日常を一人で感じていたかった。

朝日が顔を出し始めた、まだ薄暗い帰り道を僕は歩いている。

雅識くんはどこからどこまでが嘘だったのだろう。本当のことしか話せないっていうのも嘘なのか、あの涙も嘘なのか、最後の言葉

も嘘なのか。

でも結局、一番の嘘つきは僕だったのか知れない。だって、あれだけ雅識くんが好き勝手言っていて、僕は彼らを倒すと日常が戻ると勝手に願って、期待して、絶望していたんだ。加藤がいなかったらどうなっていたんだろ。気が狂ったりしたかな？ 結構、洒落にならないから考えるのは止めとこう。

腕、痛いなあ。歩く度振動が腕に伝わり、骨の中まで痛い気分。家に帰って仮眠とったら、病院に行こうかな。

こういうのもなんのことなしに思ってしまったてるのも、僕が異常たる由縁だろうか？ まあ、いいか。

足取りは軽い、心も軽い、頭も軽い。……頭はダメだよ。

取り敢えず、今はもう、昨日から続く今日と言っ日常を、明日へと繋がる今日と言っ日常を噛みしめて、楽しもうか。異常な僕の普通の日常を。

第2章・サトリゴロシ

昔から声が聞こえた。

いつからだったのかは正直覚えてないけど、声は確かに頭の中で響いていたんだ。

憤り、悲しみ、怒り、哀しみ、嘆き、苦しみ、それら全てをかき集めて一つにした。そんな叫び。

誰かとすれ違う度に、頭に響き、脳髓の奥までかきむしり、抉り回す。

その度、悲しい気持ちになった。僕に何かできないのか？ せめて、少しでも手助けをできればと思ってた。

そして、僕はその方法を見つけた。

ほら、またさつきすれ違った人からも叫びが聞こえた。

よし、あの人を助けよう。

そんなことを思った夏の日だった。

1 情報屋と黒

季節は夏。

爽やかな風など微塵も感じられない。ただ、照りつける太陽が元
気良く光り輝く季節。

八月の夏休み。僕は学校に出かけていた。何をしに？ って、部
活なんていう爽やか高校男子の理由じゃなく、補習。前の戦いの時
に負った数多の傷、膝小僧のすり傷から右腕やあばら骨の骨折、僕
の体を診察した医者から出された答えは全治、一ヶ月半。千鶴ちゃ
んと同じ病院だから、それもいいか、と思っていたのだが、何と千
鶴ちゃんが晴れて退院し、一ヶ月半の間、お見舞いする側とされる
側が変わった。

ベッドの上で聞く千鶴ちゃんの話では、どうやらすぐにクラスに
馴染み、何と！ 友達なるものがあるらしい、しかも、何人も！
全く、本当に僕と血が繋がってるのかを怪しく思い始めた。

閑話休題。

そして、病院編が終わって無事退院した後には待っていたのは、テ
スト。

もちろん分かる訳もなく、悲惨なテスト結果の中には大きな丸が
あるのもあった。正解の丸じゃない、ゼロの丸。

そんなこんなで、僕はみんながキャツキャツ言っただけで夏
休みに、僕は学校に行くことになった。

生徒と教師、そして教室。これだけ聞けば中々エロスな雰囲気
醸し出すのだが、実際は大根並の腕の太さと、Tシャツの上からで
も分かる胸筋を持つ体育教師に見守られながら、延々とプリントを
こなす地獄の時間だった。

それを無事終えて、少し涼むためそして、夏休みの暇を解消する
ための本を借りるために、学校の図書室に寄った。

夏休みということもあり、塾に行かない受験生が多く勉強しているかと思っただが、図書室はガランとしており、人の姿は見当たらない。

そんな図書室でのんびりしていると、

「だーれだ？」

いきなり目隠しされた。目に当てられた手を外そうと僕は足掻くが、手は一向に緩む気配がない。

「だーれだ？」

「誰だよ!？」

「えー、私のこと分かんのかな？」

「分からないよ!」

「もー、しょうがないなー」

目隠しが外され、僕は勢いよく後ろを振り返って、謎の人物の姿を確認する。

記憶の中を泳いで、泳いで、泳いだ。窒息しそうなぐらい記憶の海の深くまで行ったのだが。

「誰だよ!」

全く素知らぬ女の子がノートパソコン片手に立っていた。僕が通う学校の夏服を着た黒髪ポニーテールの女子高生だった。顔も可愛いつちゃ、可愛いのだが……

「私は一年D組、仙里見 統朱だよ」

「ホント誰だよ!」

学年は一緒だったが、クラスは全く違う、無駄に元気な仙里見さん。

「あなたは一年A組、秋白くんだよな？」

「うん、まあ」

「身長、自称百七十センチ、実測値百六十六センチ、体重五十五キ口、座高八十二センチ、血液型A型、家族構成は父、母、妹の四人家族、誕生日は十月十日、五十メートル走七秒フラット、立ち幅跳び二メートル二十センチ、握力左右共に四十キ口、上体起こし二十九回、持久走五分三十四秒、ハンドボール投げ三十メートル、反復横跳び五十六回、五月のテスト二百六十人中百十番、七月のテストで二百六十人中二百三十二番」

つらつらと止まることなく仙里見さんは僕の情報をほとんど息継ぎなしで話していく。何なんだ、この子は？

最後に一息、大きく息を吸うと彼女はこう締めくくった。

「……………の、秋白くんで合ってるよね？」

「まあ、合ってはいるけど、何で僕のことそんなに知ってるの？軽く引いてんだけど……………」

「そんなにつて、こんなのただの予備知識だよ。これぐらいの情報、この学校の生徒一人一人、知ってるんだよ。まだまだ私はみんなのことを知りたいわ。もちろん、秋白くん、あなたのことも。好みの女性のタイプは？ 好きなミュージシャンは？ 好きな数字は？ 好きな人は？ 嫌いな人は？ 好きな熟語は？ 嫌いな英単語は？ ああ、知りたいことが多すぎるんだよな」

目をキラキラ輝かせ、どこか遠い世界へ脳ミソが飛んでいってるとような仙里見さん。普通の女の子じゃないと思ったが、ぶっ飛び過ぎだ。

突如、何かを思い出したように、仙里見さんは手のひらを叩く。

「あつ、でも、一番秋白くんには是非聞きたいことがあつたんだよ！ 聞いてくれるよね？ よね？」

「……うゝ、まあ、いい、けど」

正直この子、怖い。

「一ヶ月半ぐらい前に起きた事件、覚えてるよね？ 毎夜、毎夜、起きていた殺人事件がパタリと終わったあの事件だよ。覚えてるよね？ あれが終わった日と、秋白くんが大怪我をして入院した日が重なってるんだけど、関係ある、かな？」

仙里見さんは僕の目を見る。それはもう、仙里見さんの目に映る僕の、動揺している姿がはつきりと見えるぐらいに。

「……いや、たまたま同じだっただけじゃないのかな？」

「そうかもしれないけど、そうじゃないかもしれないんだよ。それがどちらであろうと、少しでも可能性があるなら、私は聞きたくないだよ。それに、自転車でスピード出してて勢いよく転けたって、お医者さんに言ったらしいけど、あり得ないよね、そんなこと。それで全治一ヶ月半の重症だなんて」

「……でも、君の言葉を借りるなら、そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない、本当に僕は自転車から転けて一ヶ月半の重症を負ったかもしれないだろ？」

「そんな、たわ言聞きたくないんだよ。結局、あの事件に君は関係あるの？ ないの？ そのところ、私は知りたいんだよ」

仙里見さんは一旦僕から離れ、手を広げる。

「だって私は、情報屋だから」

「情報屋？」

「そう、情報屋。あなたが事件の加害者だろうが、協力者だろうが、被害者だろうが、傍観者だろうが、どうでもいいんだよ。事件の情報欲が欲しいんだよ。奇人変人凡人天才老若男女、貴族王族奴隷千差万別、全ての物事に対して与えられる情報。それを手にするのが私の至福にして最高の喜びなんだよ。世界の全ての情報を得るなんて無理だけど、私の生活範囲内の情報は全て知っておきたいんだよ」

そして、また、僕を見つめる。

「で、どうなの？」

「……関係、ないよ……本当に、たまたまだったんだ。仙里見さんが期待してるようなものじゃないんだ」

「ふーん、それならまあいいんだけど、とりあえず、さんはやめるんだよ。友好関係ってのはこういう事から始まるからね、あまり他人行儀は駄目なんだよ。また、これからも仲良くして欲しいんだよ」

そう言って、仙里見さん、仙里見はその場を後にした。

最後に僕を見たあの目、確実に人を怪しむそれ、だった。

図書室で本を借りた後、僕は家路に着いていた。

八月に、日常で変わったことと言えば、家に帰れば千鶴ちゃんがいることと、キリコさんが千鶴ちゃんに見られては困るため、僕の部屋以外での実体化が禁じられて拗ねていることぐらいだ。僕の部屋の隅で三角座りし、僕にギリギリ聞こえるぐらいの音量で嫌みを言ってくる。

伸ばしっぱなしの前髪が目にかかる。邪魔だし暑いなあ、髪の毛

切ろっかな。前髪を弄りながら歩いていると、突然、横から声をかけられた。

「おい、そこのお前」

声のする方を向くと、黒い男が壁に寄りかかって腕組みをし、立っていた。

正に男は黒と表現するのが一番的確だと思う。真夏だというのに、真っ黒なスーツを着用した上、カッターシャツにはこれまた真っ黒なネクタイを締めている。髪もこれまた墨汁を塗りたくった色をしていて、腕と足がモデルのようにスラリと長く、その瘦身長躯の体に似合ってる似合っていないで言えば、似合い過ぎなんだけど、男はどこか異質な雰囲気醸し出している。

「お前だよ、お前」

男は僕を指差した。

一応辺りを見渡したが、僕以外誰もいない。

「……僕、ですか？」

「だから最初からそう言ってるだろう？ お前だ、お前」

男は元々目深に被っている帽子を、完全に目が見えなくなるくらい深く被り直し、嬉しそうに口を歪める。

「今時の高校生ってのは金持ちらしいじゃねえか」

「いえ、別にそんなことはないですけど……」

「腹減った何か奢れ」

人の話を聞かない人でした。

「……いや、でも」
「いいから奢れって、ほら、あそこにちょうど定食屋があるじゃねえか、定食屋が」

男は僕の肩に腕を回し、僕を強引に引きずっていく。

その瞬間、僕は何かもう諦めた。ほら、言っても無駄な人っているじゃない？ 今絶対、僕はそういう人種に絡まれている。

この人といい、仙里見さんといい、異常な人に遭遇する日だ。僕も異常な人間の側だから、類は友を呼ぶと言っけど、友達は普通の人間に限る。

……厄日だ。

2 遭遇

数十分後。

僕の横に歩くつまようじをくわえた男は、あるうことが本当に高校生の僕に定食、しかも三人前の代金を払わした。三人前だが三人いたわけではない、男が一人で食べた。

「いやー、ありがとな。少年、こんなに食わしてもらって」

「拒否権がなかったんですけど……」

「かっかっかつ、まあ細かいこと気にすんなよ」

男は細身な体とは裏腹な豪快な笑い声を上げ、僕の背中を叩く。

「自己紹介、まだだったな、俺はしろみやひじり白宮聖だ」

「偽名ですね」

「本名だ」

「本当に白宮聖なんて名前なら、そんな性格にはなりません」

「おいおいおい、そりゃ酷すぎるぜ。じゃあ、なんだ。お前は殺人撲打って名前なら人殺しって決めつけるのか？ 小鳥を愛するベジタリアンかも知れねえだろうが」

「僕は先にあなたの性格知っちゃたから、名前聞いてビックリしただけです」

「そうか。まあ、どっちにしる失礼なことには変わりないけどな。で、お前の名前は？」

「山田太郎です」

「偽名だろ」

「高校生からお金を盗る人に本名は教えません」

「人聞きが悪い。高校生に奢らした人だ」

「それも人聞き悪いですよ」

「かつかつかつ！ それもそうだ。お前、面白い奴だな」

中々、白宮さんは掴みどころのない人だ。食事している最中にも会話をしたが、本音を話しているけど話してないような、心の奥底に本心を隠している。不思議な人だ。で、想像した通り、変な人だ。

「時に、山田くん」

「はい」

「ここ最近変わったことはないか」

「……特にはないですけど……それが何か？」

「いや、何でもなし。何か、困ったことがあれば俺に言えよ。じゃあな」

白宮さんは僕に手を振り、曲がり角で曲がって去っていった。

幸せって何だろう？

それは人類みんなが一度は考えたことがある問題だと思う。お金、成績、誉められた時、他人を貶した時、その姿は人によって違ふと思うけど、案外簡単に答えられる。

なら、この質問はどうだろう。

今、幸せですか？

これに対しては「はい」か「いいえ」、まあ、「分からない」つてもあるけど、大まかに分けて二択だ。今、現在の状況を考えて答えればいいだけの質問のはずなのに、皆、答えに戸惑う。自分が幸せな自信がないからだ。

だけど今、僕ははっきりと自信を持って言える。僕は幸せだ。何故なら、

「ただいま」

「お帰り、お兄ちゃん」

妹が無事退院し、家で僕の帰りを待っていてくれたからだ。

リビングに入ると、テーブルには昼食が並べられており、千鶴ちゃんはまだもう席についていた。鞆をその場に置き、僕も千鶴ちゃんの向かい側の席についた。

「いただきます」

昼食を食べながら、他愛もない会話をした。

学校や、勉強、部活、ほとんど千鶴ちゃんの方が喋っていたけど、千鶴ちゃんの嬉しそうなお顔が見れるだけで、僕も嬉しくなる。

「……なんでニヤニヤしてんの？」

「いや、別に」

自分の顔を触り確認する。ニヤニヤしてたかな？

「何か、お兄ちゃんらしくないな」

「何で？」

「お兄ちゃんが笑うなんて思ってたから」

冗談かと思っただが千鶴ちゃんは真顔だったので、僕は少しへこんだ。

「酷いな、僕がロボットみたい言い方じゃないか」

「うーん、ロボットとは違うよね。お兄ちゃんは何か、上手く言えないんだけど……自分と世界を切り離して見てるって言うか、話してる時に心がないみたいかな？」

心がナイフで刺された。
かなり昔っから、似たようなことを言われたことがあったけど、妹からの一言は結構効いた。

「そんなに……僕って冷た」

「うわー、凄い事件起こってるんだね」

「あの」

「首切り殺人だって、こわいこわい、隣町で起きてるんだって」

千鶴ちゃんはニュース番組を見ながら、僕の言葉を軽く流した。
てか、聞こえてないだけか？ 聞こえてないだけだよね！？ 計算じゃないよね！？

そんなことを言うと、シスコンみたいで嫌だから言わなかったが、確かにこの首切り殺人は怖い。

今月の頭に始まったらしく、今日で三人目の遺体が発見された。
凶器は鉈のようなもので、事件名と同じように首を切って殺害。被害者は無差別、犯行時刻はバラバラ。首を切った後、死体を一旦どこかに持って行き、夜になってからばらまいてるらしい。

うん……何か嫌な予感して来たぞ。正直キリコさんと会ってから口クなことないな……。

部屋に入ると、部屋の隅でキリコさんは三角座りをしながら、ぶつくさと僕の悪口を言っていた。人畜災害、悪魔より悪、冷徹アンドロイド、考えているように考えなし、等々、造語で、それでいて嫌な通り名をつけてくれる。

「何で私が自由を奪われなきゃいけないのよ」

「しょうがないだろ、千鶴ちゃんがキリコさんを見たらどう思うか」
「彼女？」
「愉快な脳みそだね」
「でも私はあの子の命の恩人なのよ」
「確かにそうだけど、それはそれ、これはこれ」
「人外差別よ！」
「差別じゃない、分別だよ」
「区別じゃないの!？」

僕はギャアギャア騒ぐキリコさんを無視し、ベッドに潜った。

翌日、学校の補習に行き、いつも通りの帰り道。

一目のつかない路地裏で、数人の男が一人の少年を囲んでいた。
かつあげをしてるんだろうな。

男はみなピーキーな髪の色をしていて、見るからにヤンキーや街のチンピラという言葉が似合いそうな奴らだった。そんな男たちに囲まれている少年はとて青白い顔をしていて、今にも貧血で倒れそうな程、線が細い少年だった。

「やっばいな、やっちなったな、助けてあげようかな。よし、助けようか。」

「あー、すみません」

「ああ!？」

声をかけるとチンピラの一人がガンを飛ばしてきた。声かけただけでそんなにキレないですよ。

「……かつあげ……してますよね？」

「ああそつだよ。わりいか？ 何もしなかつたらてめえには何もしねえよ。さつさとどっか行け」

チンピラはシツシツて手で僕を追い払おうとする。

僕はチンピラから少し離れ、携帯を取り出しカメラを使い、少年を囲むチンピラの写真を撮った。

軽快なシャッター音が響くと、チンピラ全員の視線が僕に刺さる。うわー、冷や汗がー。

「てめっ！」

「写メ撮っちゃいました。てへっ」

「ぶっ殺す！！」

チンピラたちが僕に向かい一斉に駆けてくる。

僕はチンピラたちに背を向け一目散に逃げ出した。

可愛く言っても駄目か……

人の合間を縫い、街角を曲がり、追いかけてくるチンピラに見えるくらいの一定の距離感を保ちながら僕は逃げる。チンピラたちの煙草や飲酒をしているガタガタの体と僕の人外の体、走り勝つのは目に見えている。次々と、チンピラたちは膝に手をつき諦めていく。

数分後。

僕は自分の家の前に到着していた。夏という暑い季節の中走ったので、結構な量の汗をかいた。シャワー浴びよう。

家に入り、僕はバスルームに入ってく、今日は千鶴ちゃんは出かけてるみたいだ。

ノズルを捻り、シャワーを頭から浴びる。冷えた頭で僕は考える。あのチンピラたちが助かったかどうかを。

他人を助けるなんて僕らしくないかな？ でも、あの少年はヤバい。彼の体を青白い光が覆っていた。しかも、その周りには恨めしそうな目で彼を見る、頭だけの数人の人の幽霊がいた。

多分、彼が今回の犯人何だろうな。スツゴい恨み買ってるし。

シャワーを止め、バスルームから出る。体にまとわりつく水滴をタオルで拭き取る。リビングに入り、昼食を取りながらテレビを見る。何をしても忘れられない、少年のあの目。

あの目はチンピラから搾取されるような目じゃない、強い意思がこもった人を殺すのをいとわないような目だった。

背筋が震えた。

僕は関係ない、関わりはない。

3 - 鉦振る夜に

柔らかなソファーに座り、腕を組む。
遅い。

何度時計を見ても時刻は午後七時過ぎ、チラチラ見る携帯電話にも家電にも着信なし。

千鶴ちゃんが友達の家に行ったのは昼、今は午後七時過ぎ……女の子の一人歩きは危険です。

「何イライラしてんのよ」

「してない」

「してるでしょ。しかも、七時を過ぎてからずっと貧乏揺すりしてるわよ」

「してな」

言い返しつつ足をみるとすごい貧乏揺すりしてた。秒速五回ぐらいの。しかも、両足。

僕は両足を掴んで貧乏揺すりを止める。

「してないよ」

キリコさんは頭に手を当て、大きいため息をつく。

「そんなに心配なら迎えに行ったらいいじゃない」

……成る程、その手があったか何で気づかなかったんだ？ まあ、いいや。

僕はすぐに千鶴ちゃんの携帯電話に電話をかける。数回コール音が鳴った後、千鶴ちゃんが出た。

「お兄ちゃん、どうしたの?」
「どうしたの? じゃないよ。遅いよ。今どこ?」
「駅に着いたところだけど……」
「そこで待ってて、すぐに行くから」
「ちよっ、お兄ちゃ」

それだけ言うと僕は電話を切り、玄関に向かう。

「貴方、本当にシスコンね」
「シスコンじゃないよ。妹限定心配症」
「……バカじゃないの」

冷めた目で見られた。

数十分後。

駅に着き、千鶴ちゃんと一緒に家に帰っていた。

「ごめんなさい、友達と喋ってたら盛り上がったちゃって」
「もういいよ、怒ってない。でも、遅くなった時は僕に電話しろよ?」
「すぐに迎えに行くから」
「でも、お兄ちゃんにも用事あるでしょ」
「妹の迎えより大事な用事は無いから」
「……そ、そう」

ん? 若干千鶴ちゃんが僕から離れたような……気のせいだ。

千鶴ちゃんの退院してから肩辺りまで伸びた黒い髪が風に揺らされ、川のように宙を流れる。

夏の夜風は好きだ。体にまとわりつく蒸し暑い空気を流してくれる。

「そういやー、昔、千鶴ちゃんと母さんと一緒に、蛍を見に行ったことがあったね」

「……………」

「ほら、田舎のお祖母さんの家に行った時にさ、近くの川で」

「あー、あったね、そんなこと。蛍、凄く綺麗だったよね。ありきたりかもしれないけど、光る川みたいでスツゴク綺麗だった」

「んー、そんな綺麗だったけ？」

「綺麗だったよー。でも、私とお母さんが騒いでる中でお兄ちゃんだけ、何も言わず見てたよね」

「感慨に浸ってたんじゃないか？」

千鶴ちゃんに本当のことは言わないけど、僕は正直、蛍を見て何が楽しいんだよ、と思った。ただ光るだけで寿命は短い、環境が悪いとすぐに住めなくなる弱々しい虫。でも、千鶴ちゃんの目には宝物のように映ってたみたいだ。

「あの時千鶴ちゃん、蛍を掴まえようとして、川に落ちたよね」

「ま、まあね」

「しかも大泣き」

「もう！ そのことは言わないでよー！」

千鶴ちゃんは顔を真っ赤にし、頬を膨らましながら僕の背中をポカポカと叩いてきた。僕は歩きながら後ろを振り返り、その腕を手で制す。

「ごめんごめん、悪かったよ」

「もう、止めてよね」

千鶴ちゃんは唇を尖らしてそっぽを向いた。

僕がまた正面を向いた時、月光に照らされ鈍く光る刃が僕の首元目掛け振られていた。

咄嗟に千鶴ちゃんの腕を引き、横に飛んでそれをかわした。刃が髪のをかすめた瞬間、冷や汗が一気に流れ落ち、脳から色々な汁が流れ出す。

千鶴ちゃんを引き起こしながら、銀の刃を確認すると、それは鈍だった。そして、その凶器を狂気を持って狂喜して振るう犯人は、鈍を勢いよく空振ったせいで、体勢を崩していた。

緑色のパーカーのフードを目深に被り、汚れたジーンズと、同じく汚れたスニーカーを履いている。黒ずんだ汚れはオイルか泥か、はたまた血、か。体は細く、体格からは性別は判断できない。

犯人はゆっくりと立ち上がり、僕らの方を向く。
でも、僕には分かる。

犯人の体は青白く光っていて、顔だけの人が宙に浮いて恨めしそうに犯人を見ている。どうやら、あの時出会った少年だ。……ついでないな、と言うか首切り殺人犯が何で僕らを？

鈍を辺り構わず無茶苦茶に素振りしながら、少年は近づいてくる。いつの間にか千鶴ちゃんは僕のTシャツの腰辺りを掴んでいた。その手の震えがTシャツを伝わり僕の体に伝わる。僕はTシャツを掴む千鶴ちゃんの手をほどき、その手を僕の手で握りしめる。

視界の端で千鶴ちゃんが僕を見ているのが分かったけど、僕はただ、少年を見据える。千鶴ちゃんの手を放し、少年と千鶴ちゃんの間には僕は立った。

僕をどれだけ傷つけようと、どれだけ怖そうと、どれだけ罵倒しようとして、どれだけ卑下しようとしても、千鶴ちゃんを、妹には手を出さなよ。

少年が大きく一步踏み出し、僕を鈍の届く射程距離に捕えると、長い腕を鞭のようにして、鈍を振るった。が、僕は焦ることなく空

振って無防備な少年の懐に飛び込み、顔面を殴り付けた。少年は後方に数メートル程転がり飛ぶ。人を殴った嫌な感触が手に広がった。狙われる所の検討はついてる。今までの被害者も首を切られたこと以外の外傷は、ちよつとした擦り傷しかない。首、その一手しか目の前の鉞を振り回す少年には無いはずだ。

「うわああああ！」

少年は不意に獣みたいに叫んだかと思うと頭を押さえ、身構えている僕に背中を向け逃げ出した。何が起こってるんだ？ 警察が来たわけでもない、目撃者が来たわけでもない、て言うかむしる僕らも目撃者だし、じゃあ、何でに逃げた？

少年の背中が暗闇に消えていくのを見た時、視界の隅に青白い光を纏った人影が近くの木の上に立ってるのを捉えた。

人影は逃げる少年を見届けていた。僕がその人影を見つめていると、目があった。人影はニヤリと笑うと、暗闇に消えていった。

何が何だか分からないけど、とりあえず僕は千鶴ちゃんに声をかけた。

「大丈夫？ 千鶴ちゃん」

「大丈夫だけど……ちよつと足がすくんで歩けないかも」

見ると、確かに千鶴ちゃんの足は歩けそうもない。

「おぶろうか？」

「……重いよ」

「関係ない」

「やっ、ちよつとー！」

僕は嫌がる千鶴ちゃんを力づくでおんぶし、歩き出した。

「警察行く?」

「行かないよ」

「何で!？」

「言っても無駄だよ。僕らが本当に犯人と会ったか証拠がないんだから。だって、犯人は目撃証言すらないんだよ?」

「む〜」

いきなり千鶴ちゃんが僕の肩に顎を乗せぐりぐりやってきた。

「痛い痛い! 何するんだよ!」

「だって……それだったら、私たち泣き寝入りじゃん。そんなの私やだ。殺されかけたのに……」

僕の首に回された千鶴ちゃんの腕が、ギュツと締まる。

「確かにそうだけど……」

僕みたいなバカとは違って、千鶴ちゃんは怖いんだろうな、そりゃあ鉈を持った、今話題の犯人に殺されかけて何も感じないやつの方がどうかしてる。多分、千鶴ちゃんは犯人を見てしまったから、犯人に狙われる、とか考えたりしてるんだろう。

「大丈夫だから」

「……?」

「千鶴ちゃんは大丈夫」

僕の妹に、手を出しやがって、しかも、千鶴ちゃんを怖がれせやがって……僕の世界を傷つけた覚悟はできてるよね?

家に帰ると、千鶴ちゃんは安心したからか、すぐにリビングのソファで寝てしまった。寝ている千鶴ちゃんに毛布をかけてから、二階に上がり自分の部屋に入る。

「キリコさん」

「呼ばれて、飛び出て、キリコ、です」

いつもの元気が全然ないキリコさん、だけど、今は構ってる暇はない。

「ねえキリコさん、人外が存在が人に取り憑くことってあるの？」

「あるに決まってるでしょ。貴方は実例をその目で見てるじゃない？」

「……千鶴ちゃんのやつか」

「そうそう」

そうだ千鶴ちゃんは人外存在の取り憑かれていたんだ。すっかり忘れてた。人外存在が人に取り憑くことがあるとするならば、あの少年の近くにいたあの人影は人外存在で、少年を操っていたんじゃないか？

「ならば、人外存在が人にとりついて、人を操ることって、あるの？」

「あるわよ。て言うか、貴方の妹に取り憑いていたやつの方が珍しいわよ。大抵人にとりつける人外は人間にとりついて、好き勝手したいからね」

「……何で？」

「だって、自分の姿を現して人間を殺して目撃者が出たら、その道

の人間を呼ぶかもしれないでしょ？」

「お坊さんとか？」

「そんな感じね。まあ、私たちを倒せる程の力を持った、いわゆる『本物』の人間は中々いないけど。でも、その万が一を恐れて人間に取り憑くことのできる人外は自分から手を下さず、人間の体を使つて手を下すの。し・か・も、人間の方は精神病と認定されて罪は受けることがないっていう、悪循環よね、ホント」

正しくキリコさんの言う通りだ。人外が人を使い、人が人を殺し、人は罪を受けない。素晴らしい悪循環じゃないか。

あの少年は叫び、頭を抱え、逃げた。近くには人外の存在がいた。

「でもねー、人間に取り憑いて意のままに操れる人外はとっても強いわよ？ 倒すつもりなら覚悟しときなさい」

「……ナンノコト？」

「あら、また人外を倒すつもりじゃないの？ この、万年精神錯乱の情緒不安定人間さん」

「語呂が悪すぎる」

女の勘は鋭いなー。ふと思ったけど、人外の存在に性別とかあるのかな？

「キリコさん」

「何よ」

「キリコさんって……女性だよ」

「違うわよ」

「……なっ!？」

うっ、嘘だろ、女じゃなかったのかよ……てか、風呂場に出てきた時のドキドキを返せ！ 人の心臓の鼓動の回数は決められてるっ

て聞いたことあるぞ！

「……どおりで胸が無いと思ったよ」
「黙れ！」

視界が横に吹っ飛ぶ。簡潔に言うとかかなりの力で頬を叩かれた。頬を手で押さえ床に横たわる僕の前で、キリコさんは無い胸を張って自信満々に答えた。

「レディよ！」
「……ブツ飛ばすよ」

何だこのムカムカ、しかも、意味一緒じゃん。僕は立ち上がり、ズボンをはたいて埃を払う。まっ、取り敢えず。

「キリコさん」
「何？」
「明日はデートに行こうか」

4 - 誰が救いを求めるか？

これは、デートって言うのかしら？

他に何て言うんだよ。男の子と女の子が絡まりながら歩いているんだ。デートと呼ばずして何と呼ぶ？ て言うか、頭の中で僕も会話できるんならさっきに言って欲しかったよ、何だったんだよ、あの、君が僕の頭の中で喋って、僕は声に出して会話してた時のことって

まあまあそのことはいいじゃない、って言うか……絡まるって、私は霧の状態じゃない

うん、そうだけど

こんなのデートとは呼ばないわ！

少年とは会う可能性はかなり少ないけど、少しでも情報を集めるために、昨日襲撃された場所から少ししたところにある商店街を、僕は、いやいや、僕らは歩いていて。

人の視力じゃ見ることができない程、薄くなった霧の状態のキリコさんが、人の雑踏に少し嫌気が差している僕に対し、抗議の声を上げる。だが、僕は抗議を無視する。

だって、もし人間状態のキリコさんと歩いていて、犯人外に見つかったら大変だしね。相手はまたもや人外ですから。

まっ、勘弁してよ。今度アイス買ってあげるから

……約束よ

右を見ても左を見ても少年は見当たらないし、何の情報も入らない。入ったとしても、キリコさんは案外物につられやすいということぐらいだった。

「さすがに難しいな」

一応少年の顔だけは分かっているけど、それだけで住所とか割り出せる程の技術も人脈も持ってないしな。正に手詰まり。

大きなため息を吐いた僕の目の前に、立ち塞がるようにして一人の男が現れた。キャップを目深に被り、無精髭を生やした、青い光を纏った男が。

人外だ。

男はジーンズのポケットに手を突っ込んだまま、僕に言う。

「付いてこいよ。ここは人間が多い」

男は顎で行き先を示すと、僕の反応を待たずして歩き始めた。

こいつが少年に取り憑いている人外の存在なのか？ そのわりには、簡単に人前に姿を現すじゃないか。どういうことだ？ どういう意図だ？ くそー、分からない。

……………例え罨であっても行くしかないだろ。数少ないチャンスなんだ。今を逃したら、いつチャンスは来るんだ。余計なことをごちゃごちゃ考えるのは、僕の悪い癖だ。今はとりあえず、この人外をどうやって殺すかを考えよう。

僕は人混みに消えかけた男の背中を追った。

男は周りに雑木林が生えている人気のない公園の中に入っていった。

僕も男の後に付いて公園に入ると、男は開けた場所で僕を待っていた。

「おっ、来たか」

「まあ、あの〜、一つ質問いいですか？」

「いいぜ」

「あなたは人外の存在ですか？」

「お前なら、見たら分かるだろ？」

「そうですか、では、キリコさん！」

僕がキリコさんの名前を叫ぶと、キリコさんは霧の状態を濃くして、男の目隠しをした。打ち合わせ通り。

僕は戸惑う男に向かって駆け、速度、体重を乗せた拳を男の顔面に振るう。が、男はそれを軽くかわした。

僕は勢い余って、地面に転がる。何でかわされた？

すぐさま立ち上がり、何度も拳を振るうが、男は軽々と全ての拳を避ける。体力も限界なので、最後の―撃に、と放った拳も軽々と手のひらで受け止められた。

男は僕の拳を握り込んだまま、もう片方の手で目の前の霧を払った。風が吹いても全く動かない霧の状態のキリコさんが、一瞬にしてかき消された。

男の目と、僕の目が合う。

「こんな小細工じゃあ、俺には勝てないよ」

「何で……」

「見えてないのに避けれるかって？ だって、俺は人間の心が読めるからな」

「なっ、そんな……嘘……だろ？」

男は一分の狂いもなく、僕とセリフを八モらせた。

本当に、心が読めるのか。勝ち目ないじゃん。

「……僕を殺すのか？」

「いやいやいやいや、殺しなんてしない。ただ、一つ、頼みがある

んだ」

「頼み？」

「ああ、あいつを助けて欲しいんだ」

「……あの子？」

「お前を襲った少年だよ」「はあ!？」

あの少年を操って、人を殺させてなのはこいつじゃないのか？

「俺が？ まさか！ 確かに俺はあいつに取り憑いているが、そんなことはしてない！ 俺はあいつを助けたいんだ！」

「……じゃあ、何で取り憑いてるんだ？」

「俺は人間の心を読むことや、人間の心を操ることに長けている、サトリという妖怪だ。……あいつは自分の親から暴力を受けていた。仕事や近所付き合い、些細なストレスの捌け口としてあいつの両親は暴力を振るった。そして、振るわれたあいつの心は壊れかけていた、いや、俺があいつに取り憑いて、暴力の時間だけでも心を閉ざしてやらなかったら、あいつの心はもうすでに壊れているはずだ」

サトリさんはキャップを深く被り直し、唇を噛みしめる。

「で、何で僕なんですか？ あなたが少年を止めてあげたらいいじゃないですか」

「俺があいつの体を操るのに力を入れたら、あいつの心はどうなる？ 体を操るのに力を入れたら、ギリギリ保っているあいつの心が崩れる、だから」

「だから、僕に止めると？」

「……あいつの事情が分かるのはお前らだけなんだ。あいつは、俺に取り憑かれて人間の心の奥底の声が聞こえるようになってしまった……」

「……人の心の奥底？」

「ああ、どんなに表面上、いや、心から今を楽しんでいるようでも、ほとんどの人間が心の奥底で自分の置かれた状況について、不満や苦しみ、憤怒の叫びを上げているんだ。それが、聞こえるようになるんだ」

まあ、そうだろう。現状に不満を抱かない人間なんていないし、過去に後悔がない人間なんていないし、未来に不安がない人間なんていない。

「そんな人間の苦しみの声が聞こえるようになったあいつは、あいつは……」

「人を殺した」

「そうだ。頼む！ あいつを助けてくれ」

サトリさんは僕の目の前で土下座した。額を頭に擦り付けて、他人から見たら必死な、僕から見たら無様な、懇願をした。

「そんなこと、僕には関係ないですよ」

「……………」

「何で僕がやらなきゃいけないんですか？ あなたがああの少年を甘やかしたから、こんなことになったんじゃないですか？」

サトリさんは顔を上げた。キャップの下から鋭い眼光が覗く。

「……………俺がやったことは無駄だって言うのか？ 俺にあいつを助けなきゃ良かったって言うのか？ 俺がいなかったら、あいつは死んでいた。あいつに……………死ねって言うのか」

「人を殺す奴なんて死ねばいいさ」

「……………ふざけるな」

サトリさんは地面を手で引つ掻き、肩を震わす。

「ふざけんじゃねえぞ！」

避ける間もなく僕は胸ぐらを掴まれ、近くの木に叩きつけられた。足が宙を掻き、酸素の供給が悪くなる。

「あいつは人間を助ける力もないし、方法もない、お前みたいに自分と他人を分けて考えられるような頭もない。ただ、あいつは、優しいだけなんだよ……」

「……僕が助けるのは自分の世界だけだよ」

そう、僕は僕の世界、日常だけを守る。

「あの少年を放っておけば、少年が妹の友達を殺して妹が悲しむかもしれない……少年が妹の知り合いを殺して妹が悲しむかもしれない……少年が近所の猫を殺して妹が悲しむかもしれない……少年が妹を殺すかもしれない。だから……僕は自分の世界を守るため、少年を止める」

「……なっ」

首の締めりが弱くなり、僕は地面に着地した。無理に喋ったから堪らずその場に座り込み、咳き込む。

「ゴホッ、ゴホッ」

そして、僕は深呼吸をする。枯渇していた肺に酸素が満ちていく。顔を上げると、啞然とした顔でサトリさんは僕を見下ろしていた。

「……どういうことだ？」

「だから、僕は決して少年を助けない。僕は自分の日常を守るために少年を止めるだけ、ただそれだけの話です」

街灯から伸びる放射状の光が突き刺さる公園。

「何が『だから、僕は決して少年を助けない。僕は自分の日常を守るために少年を止めるだけ、ただそれだけの話です』、よ。かっこつけてんじゃないわよ」

キリコさんが明らかに僕をバカにした顔で言う。

「別にかっこつけたつもりじゃないけど……」

「はいはい、分かった分かった。自分の世界を守りたいだけなのよね」

「そっだよ」

僕はただ、自分の世界を守りたいだけ。

「だから、少年を止める手段は選ばないよ」

「時には殺すってこと？」

「時と場合と気持ちによる」

「貴方、人殺しは死ねとか言っというて……」

「嘘も方便だよ」

「信頼できない主ほど頼りないものはないわ」

やれやれといった感じで、キリコさんは額に手を当て首を振る。

「でも、キリコさんも嬉しそうじゃん、人助けができて」

「……別にそんなことないわよ」

「いやいや、キリコさんは霧の悪魔だ何だと言っというて、人を助けるもんね？」

「そんなことないわよ。私はただの」

キリコさんが僕に何か言いかけた時、街灯の光がブツリと消えた。公園には夜が下りてきて、空に浮かぶ月が雲の間から顔を出す度に夜のカーテンで覆われたものの輪郭が浮かび上がる。風に揺れるブランコ、砂山が築かれたままの砂場、滑り台、僕とキリコさん。そして、少年。

少年はゆつたりと僕に近づいてくる。右手に鉈を左手は拳を握り、心に狂気を持って。

「やあ」

僕は右手を上げ、できるだけ陽気に言った。意外なことに、少年はピタリと足を止めた。

僕は何もせず、黙って僕を見つめてくる少年に問いかけた。

「なあ、君。君は何で人を殺すんだ？」

「苦しみから、解放するためだ」

「それは、もっと他の方法はないのかな？」

「ない」

即答だった。少年は続ける。

「この世に、苦しみから逃れる場所や苦しみから守ってくれるヒールなんてない。だから、死ぬしかないんだ」

「じゃあ、何で君はまだ死んでないんだよ。聞いたところじゃ、君はかなり劣悪な環境で生きているらしいね。この世から一番逃げた

したいのは君じゃないのか？」

「そうさ、僕は早く死にたい。でも、助けてあげなきゃいけないんだ。僕のこの力はそのためにあるんだ。声が聞こえるようになってから、僕の体は生まれ変わったように強くなった。この力は、神様が僕に苦しんでいる人を救えっという印だ。それに、僕は一応、最低の環境からは抜け出した。まだ、汚い世の中にいるけどね」

「……どういうことだ？」

「だから、劣悪な環境からは抜け出したってことだよ」

「……まさか」

「そうだよ。力を手に入れて一番最初に殺した人は僕の両親だ。彼らもまた、心の奥底では救いを求めるものだったんだ」

「可哀想だよ。君は」

「……僕の？ 何処が？」

「いや、君に言っても無駄だ」

この世界が苦しみばかりなんて、それは違う。確かにこの世界は苦しみがある。けど、楽しいこともある。その二つが同じ比率とは、口が避けても言えないけど、楽しいことはある。ただ、彼がいた世界はそれを知るには狭すぎた。世界が狭いなんて僕には言われたくはないと思うけど、彼の世界は狭すぎた。

彼の世界にあったのはただ一つ、暴力。何をするにも、暴力、暴力、暴力。だから、人助けも暴力。どんなに優しくろうが、彼はそれしか知らないんだ。そして、彼は普通の人間を圧倒する力、暴力を手に入れ、それを善として力を行使していくだろう。

本当に可哀想な奴だ。

僕は少年を見た。

「お喋りはここまでだ。最後に、君に、良いことを教えて上げるよ」

「なんだい？」

「君の両親も、君が殺した人達も、僕も」

僕はできるだけ顔の表情を緩める準備をする。少年が不思議そうに僕を見ている。

「誰も君の助けも救いも求めてねーよ」

僕は自分にできる最高の笑顔と共に、そう言った。

5 風が吹いて

暗闇の中で少年の振るう鉈が、月の光に照らされ銀の線を描き、襲いかかってくるが、上体を反らしてそれを避ける。自分の体の勢いに負け、ふらついた少年の体に二撃三撃と落ち着いて僕は蹴りを加える。

時刻は二時、確かに少年は鉈と人を殺している経験を持っているけど、今は僕らの時間だ。僕の目には少年の動きは暗闇の中でも確認しやすく、ついでに鈍い。

少年は何回も地面に転がるが、何回も立ち上がり僕に襲いかかる。まるで、分からないかのように、暴力しかないことはないことを、分からないかのように。

少年が何度目になるか分からない鉈を振るう。その鉈を持ち手を僕は掴み、握りしめる。骨が軋む嫌な音が聞こえ、少年は痛みで鉈から手を離れた。

「なあ、気づいてんだろ」「……何のこと？」

歯を食い縛る少年の目を見る。暗く暗く、深い黒の瞳に僕は潜る。分かる。少年が考えてることが、僕には分かる。少年の心を漁り、崩し、喰らう為の言葉を吐く。

「暴力しかないことなんて、それ以外にも方法があることを、君はもうすでに気づいてるはずだ」

「……知らない」

「いや、知ってる。君は人を殺していく内に気づいたはずだ。これしか方法がないのか？ ってね。だけど、もう、人を殺してしまっただから、殺すしかないと思ったんだよ。殺して殺して殺して殺して

殺してる間には考えることを忘れられるから」

少年は僕から目を反らし、唇を噛みしめる。そこから赤い液体が流れ、少年の頬を伝う。

「……違う」

「違うない」

空いてる方の手で少年の頬を挟み、力づくで僕と目を合わさせる。

「君は人を殺した。そして、その間違いに気づいた。けど、君は逃げた。人を殺すという方法で、他の人間を自分が犯した過ちを、忘れさせる、肯定させる道具として。でも、事実からは誰も逃げられないよ。君は、人を、殺した」

「……じゃあ、じゃあ！ どうすれば良かったんだよ！？ そうだ！ あんたの言う通りだ！ 気づいてたけど、どうすることもできないじゃないか！ 気づいた時にはもう、俺は人を殺してたんだ！俺は、俺はどうすれば良かったんだよ！」

涙を流し、唾を飛ばし、大口を開き、真っ赤な舌を懸命に動かしながら、少年は情けない程に泣き叫ぶ。そんな少年に、僕はそつと耳打ちした。

「知らないよ。そんなこと、お前が考える」

「なっ!?!」

少年が何かを言おうとする前に少年の腹に拳を叩き込んだ。少年は僕にもたれ掛かると、ズルリと地面に落ちた。気を失った少年の横顔は、ただの少年が眠っているようだった。

後悔と言っか、虚無感と言っか、胸の真ん中に気持ち悪い不快感

が漂う。それを振り払う為に僕は口を開く。

「こんなところで良かったの？ サトリさん」

虚空に向かって放った言葉に反応し、公園の木の影からサトリさんは現れた。

「上出来……とまでは言わないが、期待通りって感じた」

と言いながら、サトリさんは少年の傍に行き、少年の頭を撫でてやる。

サトリさんは立ち上がると、少し涙を浮かべながら僕らに向かって言った。

「ありがとう」

横を向くと、大して何もしてないキリコさんが満足そうに笑っていた。

サトリさんの方に向き直ると、少年を担ごうとでもしたのか、少年に手を伸ばしたサトリさんが、黒い何かに蹴り飛ばされた。凄い勢いでサトリさんは僕の視界から消え、代わりに黒い何か、いや、真っ黒な人が立っていた。

「よう、山田くん」

「……白宮さんじゃないですか」

それは、白宮聖だった。だけど、別にそんなことは関係ない、問題は、何で白宮さんが心を読めるはずのサトリさんを蹴り飛ばせたのかってことだ。白宮さんは僕が見る限り、人外の存在じゃない、普通の人間だ。けど、それじゃおかしい、人間程度の存在が人外の

存在を、存在の格が上の存在を蹴り飛ばすなんて。そもそも何の目的で……

「おい、何ごちゃごちゃと考えてんだ」

耳元で声がした。

目を離れたつもりなかったのに、気がつけば白宮さんは僕の肩に手を回し、横に立っていた。

「……別になにも」

「いや、お前は絶対考えてるね。人の心を読める妖まじを何で俺が攻撃できたか、とか俺の目的は何だとか。お前の顔は行動より思考から動くタイプの顔だ」

「白宮さん、あなたは何者なんですか？」

「俺か俺は、そうだな……」

白宮さんは僕の肩から手を離すと、僕のTシャツの襟首を持ち、そのまま僕を強引に放り投げた。視界がぐるぐる回り、地面に到着する。

立ち上がり、前を見ると光る縄のような物で体を縛られたキリコさんと、光る縄の先の輪に手を通した白宮さんがいた。白宮さんは親指で自分の顔を差し、大声で言った。

「俺は、邪なる妖を葬り、滅して、消し飛ばす、月夜げの戦闘担当、白打拳の開祖にして師範にして一番弟子にして修行中、用は俺一人の流派の看板を背負う、神対しんたいが一人、『黒の破壊者』白宮聖だ！」「あの、こんな状況でなんです……言ってるで恥ずかしくはないですか？」

「うるせえ！……まあ、今回はまさかお前が本件に絡んでるとは思わなかったけどな」

「本件つて？」

「この妖を捕まえることだ」

白宮さんは縄を引っ張り、キリコさんを前に立たせる。

「だから、契約を切れ」

「……えっ？ 契約は僕がキリコさんが死なない限り消えないんじゃない？」

「ハッ！ それは山田くん、騙されてるよ。契約は契約を結ぶ際に決めた交換条件を満たしていれば、主側からはいつでも解除できる。例えばそうだな、毎日血液をある決められた量を与える契約だったら、今日の一日分を与えた時点でその日の内に解除できる」

「そんなこと、聞いてないけど、そもそも、キリコさんの交換条件つて……」

キリコさんは俯いたまま何も答ええない。

「それも教えて貰ってなかったのか、この女の交換条件はお前の気配に自分の気配を同化してもらうことだよ。だから、今尚、お前は交換条件を満たしているんだよ。さあ、だから契約を切れ」

「何で契約を切らないといけないんですか？」

「カーッ、そのことも知らないのか」

白宮さんは苦笑しながら後頭部を掻きむしる。

「契約すると、主と妖の同化が始まる。これは気配の同化とはまた別物で、存在の同化だ。だから、ただの人間が妖と契約すると、存在の格が上がるんだよ。だって妖と同じ存在になってるんだからな。んで、お前が契約を解かないといけない理由だけど、お前は存在だけじゃなく、気配も同化している。言い換えると、お前はこの女と

同一人物だと思ってもいい。この女はこれから月夜の本部で裁判にかける、要するに死ぬかもしれない。その場合、まだ完全に同化してないとはいえ、お前に何らかの影響が出るのは確かだ。まあ、三日待ってやるから考える。決めたらこの電話番号に電話しろ、契約の切り方を教えてやるついでに、別れの挨拶ぐらいはさしてやるよ」

白宮さんは胸ポケットから名刺を取り出す、僕に投げる。そこには名前と電話番号が書いてあった。

ずっと目を伏せたまま、僕の方を見ようとしないキリコさんを抱え上げ、立ち去ろうとする白宮さんの背中に、僕は声を投げかける。

「何で、キリコさんが……」

「まあ、なんつーか、アレだ。えーと……ああ！ めんどくせー！ こいつは五十人いた村を壊滅させた張本人だからだよ！」

そう言っつて、白宮さんはキリコさんを連れ、消えて言った。

情報が多すぎる、妖に月夜に神対にキリコさんに白宮さんにそれと……。

「あいつらに……関わらない方がいい。……契約を早く切るんだ」

声のした方向を見ると、公園の茂みから左肩から下を失ったサトリさんがいた。僕はすぐにサトリさんに近づくと肩を貸し、近くのベンチに座らせた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、じつとしていればいづれ治る」

「あの人は何者なんですか？」

「あいつを説明すなら、まず、月夜について説明しなきゃいけない。さっき、あいつが言っていた『妖』というのは俺たちみたい

な人外の存在を総称する言葉だ。そして月夜は人を殺したり、悪事を働く、人に害を及ぼすような妖を捕まえる、または、殺す為にある組織だ。この組織は指令部や諜報部が上にあり、諜報部や戦闘部が仕事を行うらしい。聞いた話だから詳しいことは知らないが。けど、あいつ、白宮聖は月夜に追われたことがない俺でも知ってるくらい有名な。あいつは世界で六人しかいない神をたつた一人で殺れる人間、神対の一人だ。その権力は月夜の中でも特別扱いらしい」

「神って土地神とか？」

「君が知ってる土地神は小さな寺、神社や古ぼけた寺、神社、大して信仰を集めていない土地神のはずだ。そんな奴ら俺らでも殺れるけど、あいつらが相手どる神はもつと巨大な力を持ち神やそれに匹敵する力を持つ妖だ。本来はその月夜のエキスパート二十人を持つてしても倒せるか分からない相手だが、あいつらはたつた一人で対等に戦うし、殺す」

「よく分からないですけど、凄い人なんですね」

「ああ、それぐらいの解釈で構わない。あいつらとは本来、合うことも会うことも逢うこともないはずの存在なんだ。そして、あの白宮は神対の中では一番有名だ。妖と人が戦うには妖と契約するのが基本だ、君みたいに。それは月夜の戦闘部にも、神対にも、当てはまる。妖と契約していない奴なんてほとんどいない。だけど、白宮は鍛え上げた霊能力と肉体で、妖と契約せずとも妖を葬る。神対の中ではただ一人妖と契約していないし、神対の中でも最強と言われている。その身一つで妖を次々に薙ぎ倒すその姿から、ついた異名は数知れず。『黒の破壊者』から始まり、『黒風』『殲滅者』『壊人』『黒白』等々、とりあえず、あいつに立ち向かうのだけは止めといた方がいい」

「……分かりました」

色んな事を知った夜だった。だけど、情報の波の中で一つ、何度も何度も繰り返される映像。昔、それこそ初めて会った時、自分の

ことを霧の精霊と言つより、霧の悪魔と言つた時のキリコさんの悲しい顔が、繰り返される。

6 キリコさん

「じゃあ、港の倉庫で」

「ああ、待つてるぜ。山田君」

「はい、では」

日が暮れだした午後、僕は電話を切ると、白宮さんとの待ち合わせ場所、港の倉庫に向かった。あの夜から三日、期限ギリギリ、その間ずっと考えてた。……ごめん、嘘。考えるより先に答えなんて出てた。

程なくして僕は港の倉庫に着いた。重い扉を開け、その中へ入り、扉を閉めたと同時にバチリと音を立て灯りが点いた。いきなりの光で目を細めた僕の前に、いつもと同じ真っ黒なスーツに身を包み、夜より暗い帽子を被っている白宮さんがいた。その後方には、鉄柱に光る縄でくくりつけられたキリコさんがいた。

「よう、山田くん。決心はついたよな？ さあ、意を決して叫べよ。契約を解除するとな」

「嫌です」

「何でだよ、山田くん。契約を解除せずにこの妖を消すと、山田くんに悪い影響が出るかもしれないんだぜ」

「それも、嫌です」

「じゃあ、さっさと」

「嫌です。僕は契約を解除しにここに来たんじゃない。キリコさんを引き取りに来たんだけだ」

僕がそう言うと、白宮さんは何か、とても珍しい動物を見たような目で僕を見る。

「バカか？ 山田くん。山田くんがこの妖を助ける理由なんてないだろ？ こいつは一つの村を壊滅させた妖だぞ」

「聞きました。でも、助けます」

「……そうか、詳しく話してないからそうなるんだな。よし、じゃあ、俺が話してやるよ。ある村でな……」

「止めて！ 私が話すわ」

白宮さんが話し出そうとした時、キリコさんはそう叫んだ。白宮さんは振り返ってキリコさんを見ると、倉庫の端に移動する。キリコさんが僕を見た。

「私はある村で、いつの間にか生まれてた。妖として。いきなり生まれてどうしようかと思ってた時、一人の女の子が私に声をかけてくれたの。霧の妖の私に。嬉しかったわ、とても、毎日遊んだ。でも、ある坑道で遊んだ時、私は誤って坑道に漂っていた毒ガスから出現してしまったの。早く女の子を私から離れるように言ったけど、女の子は中々離れなくて……そして、死んだわ。私は動揺したどうすればいいか分からなくなった。その時、坑道に女の子の両親が入って来たの。両親は私と死んだ女の子を見ると飛びかかって来たわ。でも、私は毒の霧。最初に飛びかかって来た父親は死んだわ。けど、母親は逃げ出した。助けを呼びに行ったのね。私はここまで来たら殺すしかないと思って母親を追いかけたわ。この事件を、ただの坑道から漏れた毒ガスで死んでしまったような事件にする為。そして、私は坑道の出口で母親に追い付き殺したわ。でも、そこには何人も村人が居たわ。……それで、私に、襲いかかってきて、皆、死んだわ」

語り終えたキリコさんは僕と視線を合わせたくないかのようになり、顔を伏せた。

「はい、じゃあ、決心は決まったかな？ 山田くん」

白宮さんはまた僕の前に立ち、問いかけてきた。

「契約を解除する決心は」「ええ、キリコさんが何人も人間を殺したのは分かりましたし、例え、最初は事故だとしても、最後は故意に殺していたのは分かりました」

僕は白宮さんの肩口から見える俯いたキリコさんを見る。

「でも、嫌です」

白宮さんが何か言おうと口を開けた瞬間、ガバリとキリコさんを顔を上げ、僕を睨み、叫んだ。

「さつさと契約を解除しなさいよ！ 私は貴方に嘘を吐いていたのよ！？ 私は貴方に隠していたのよ！？ 私は人間を殺したのよ！？ 何人も何人も！ 何でこんな私と今も契約を結んでるのよ！ 私は罪人なのよ！？ こんな罪人の為に貴方が傷つく理由なんてないのよ！？ だから、だから！ 契約を解除しなさい！」

「……えっ、何で？」

そう言った僕を、白宮さんとキリコさんはポカッと口を開けて見る。

「キリコさんが人を殺した。それは分かった。キリコさんが嘘を吐いていた。それも分かった。キリコさんが隠していたこと。それも分かった。キリコさんが罪人なこと。それも分かった。契約を解除すれば僕は傷つかない。それも分かった。僕は、全部分かったつもりで言わせて貰うよ。それが何だよ」

「……えっ？」

「そんなこと僕には関係ないね。どこで誰が死のうと、どこで誰が殺そうと僕には全く無関係じゃないか？ 僕は無関係な物事には首を突っ込まないことにしてるんだよ。だから、僕にとって、キリコさんが人を殺したとか、嘘をついたとか、隠してたとか、そんな昔のこととか、どうでも良いし、関係ないよ」

「でも、私は三日前まで貴方を騙していたのよ？ それは昔、貴方には無関係？」

「今僕が生きてる今日に比べれば昨日とか一昨日とか三日前とか、そんなの大昔だよ。それに、僕は心が広いから嘘ぐらい許せるよ。大体、僕自信が嘘つきだしね」

「……でも、私は」

「どうでも良いよ、今までキリコさんがしてきたことなんてさ。重要なのは、一度出来た僕とキリコさんの関係を壊さないことさ」

「……私と、貴方の、関係？」

「うん。主と使い、キリコさんはそこで黙ってみてよ。主命令。僕は何とかして、キリコさんを助けるから」

キリコさんは困った表情をした後、口を閉じた。それを確認すると、僕は視線をキリコさんから白宮さんに移した。白宮さんは今の状況が本当にめんどくさそうに後頭部を掻いている。

「はぁー、クソッ。山田くん、本当にやる気かい？」

「まあ、やる気はほどほどですが、殺る気はマックスですよ」

「あっそ」

白宮さんの姿が一瞬ぶれたように見えた瞬間、僕の視界は手のひらに覆われた。顔面に衝撃。僕は宙を舞い、数メートル後方にある倉庫の扉にぶつかかった。扉が大きな音を立て、僕を止めた。

ふらつく頭を抑え、僕は立ち上がる。白宮さんはかったるように

僕に視線を投げ掛けてる。白宮さんがしたのは、ただの掌底。だからこそ分かる圧倒的な実力差。僕は鼻から出る生暖かい液体を拭い、思案する。この化け物を倒す手立てを。

……あるのか？

「なにボーツとしてんだよ！」

「うおおー！」

気づいたら側頭部に向け蹴りが放たれたいた。ギリギリのところ
で両手でガードしたけど、それごと蹴り飛ばされた。僕は何とか受け身を取って、さっきまで僕の居た場所に、ポケットに手を突っ込んだまま立っている白宮さんに目を向ける。

「人間の動きじゃないでしょ」

「いや、人間だよ」

「じゃあ、何でそんな速く動けるんですか？」

取り敢えず、時間を稼げ。そして、今の現状を理解しろ、利用できる物を探すんだ。

「お前だつて存在の格が上がってるから、身体能力が上がってるだろ？ 俺は存在の格は上がってないが、所謂、霊力が使えるんでね。それを使って身体能力を上げてるんだ……」

白宮さんは三メートル程跳躍して、片足を上げる。

「よっー！」

かけ声と同時に、上げた片足を僕の肩めがけ振り下ろし、さなが

ら断頭台の刃のような踵落としを繰り返すが、さすがの僕もこんな大振りの攻撃に当たる訳にはいかなく、横っ飛びにかわすと、重い打撃音と共に白宮さんの片足が僕の居ない地面に膝下ぐらいまでめり込んだ。

……ヤバすぎでしょ

物の試しにと、足がめり込んでいる白宮さんの顔面に蹴りを放つてみたけど、白宮さんは軽々と避け、僕の足を掴み地面に僕を何度か叩きつけ、そして、ぶん投げた。地面にぶつかる衝撃、痛み。目が霞んで来た。

「もういいだろ？ 山田くん。実力の差は明らかになったじゃないか」

「……確かに……でも、諦める訳にはいきませんよ」

体に力を入れる度、あちこちが痛む。ギシリギシリとまるで油の切れたロボットみたいに体を動かす。

やっと立ち上がり、顔を上げると白宮さんは目の前にいた。

「そうかい」

白宮さんが拳を振り上げるのが見えただけど、体が反応できない。

一拍置いて、白宮さんの拳が僕の腹を貫いた。思ったより感じない痛み。……てか、あれ、痛くないぞ。白宮さんの腕が貫通したままのは分かるんだけど……。

恐る恐る自分の腹部を見ると、白宮さんの腕が僕の腹にはまっていた。詳しく言うと、僕の殴られた腹部が霧となり、白宮さんの攻撃を透かしていた。少し驚いている白宮さんを殴った。今度も避けられるかと思っただけど、意外なことにモロに入った。

多分、僕はキリコさんと同化しているのだろう。完全に化物だな。まあ、白宮さんの攻撃は霧になってかわせるから、考える時間はた

つぷりできたな。

「これが、同化って奴ですか」

「そうだ。お前はほぼ、あの霧の妖と同化したんだよ。……可哀想に余計苦しむはめになるんだぜ」

「？」

白宮さんは駆け出し、僕の右肩を殴る。僕の右肩から下は何の抵抗もなくふっ飛んだ。が、僕の右肩から下の部分は霧に変化し……

「……あれ？」

霧に……変化しない。それどころか、痛みが痛みが痛みが痛みが痛みが

「ガアアアアアアアアア！」

肩口からは血は出ないものの、はつきりとした痛みが伝わり、意識がとびかけ思わずしゃがみこんでしまう。

「透かせられると思ったんだろ？」

見上げると白宮さんが僕を見下ろしていて、その手は白く輝いている。

「甘いぜ、山田くん。フレンチトーストより甘い。見るよ。この手。霊力を纏わせることで妖の存在を破壊できるんだぜ。新しく腕を生やしたりしない限り、その腕は霧と変わらないぜ。どうだ？ 効果は実感してるか？」

「……ええ、まあ」

「ハッ、息も絶え絶えじゃねーか。さっ、契約を切れ」

「……拒否します」

「もういいじゃない！」

声をした方を見ると、キリコさんが泣いていた。

「もういいじゃない。貴方が私の為にそこまでやる必要なんてないわよ。そもそも、私は、貴方がここまでやってくれただけで十分よ。ありがとう。だから、もう、契約を解いて。一言、一言だけ、言うだけでいいんだから」

キリコさんはそう言って微笑んだ。泣きながら微笑んだ。……僕の中の何かが切れた。

「なら、何で、君は泣いてるんだよ！ 死にたくないからだろ！？ 生きたいからだろ！？」

キリコさんがビクリと体を震わした。

「どうなんだよ！ 答えるよ！」

「……生きたいに決まってるじゃない！」

「じゃあ、しがみつけよ！ 生きることが最後まで諦めるなよ！ 死にたいならさっさと死んでくれていいよ！ ただ、キリコさんが生きたいって思うなら、何としてでも、生きるよ！ そう思ってる間は、僕は死んでもキリコさんを助けるよ！ じゃないと、妹を助けてくれたキリコさんに、恩を返せないだろ！？」

その時、いきなり頭を白宮さんに踏まれた。

「なら、山田くんは死んでも文句は言わないんだな？」

「言つに決まってるじゃないですか。どうしたんですか？ 白宮さん、バカになつたんですか？」

「……いや、だつてお前、さっき、死んでもって……」

「誇張表現に決まってるじゃないですか。殺されたら数百代まで呪いますよ」

「いったい、俺はどうしたらいいんだよ」

困った顔で頬を掻く白宮さん。

「だから、さつさとキリコさんを解放して下さい。後、あつちに落ちてる僕の腕、拾ってくっ付けてくれたらとても嬉しいんですけど」
「……………」

白宮さんが俯いた。ヤバい、キレた？

「ハツハツハツハツハツハツ！ ここまで自分の利益ばかり考える奴は初めて見た」

と思つたら爆笑した。

「本つ当に面白い奴だな。山田くん。よし、俺から上に言つてその妖の件を無しにしてやるよ」

「そんな権限あるんですか？」

「バカ野郎、俺は月夜の戦闘部隊……」

「あつ、それ、長いからいいです」

「てめえ。とりあえず、電話を試してみるわ」

白宮さんが携帯で電話をかけながら指を鳴らすと、キリコさんを縛っていた光る縄が消えた。キリコさんはゆっくりと立ち上がり、僕の腕を拾い、その腕をくっ付けてくれた。

「壊された貴方の存在を補充しといたから」
「ありがとう。至極感謝」

電話を終えた白宮さんは僕らに近づく。

「さすがに無実とまでは行かなかったが、罪を違う形で受けること
しただ。近い内に会うことになる」
「どういふことですか？」
「お前らも月夜の一員になるってことだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890k/>

僕とキリコの怪奇譚

2011年1月13日17時06分発行